



時雨の巻

今井菊堂著  
其の巻目集







讀書家

君之何れ爲に書を著とし思想を述ぶるや

著作家

君之何れ爲に書を讀むや

讀書家

樂之を得んが爲なり

著作家

樂みを得て何に在るや

讀書家

著作家 大喝一聲

樂之を得て唯も自ら樂み更も其れを人に  
施すあはるく猶更に自ら爲まほるあをな  
とんば汝先づ書を讀むを止めよ  
とこれこれ又贊して曰く

草 蘆 集

時雨比まき

目次

穰のわが庵  
草やとり  
亡き妻  
深山路  
米つた  
彼れ姿  
秋の朝  
尼御前  
古た戀人

一 三三三二二二  
七三三一九二一 九六一

國家の廢物とならむと欲せば、先づ書と  
繙るざるに如かず。苟も一篇の文章を讀  
み、一句の詩歌だも解せむとならば、宜  
ましく大ひに爲す有れば覺悟もかるべし  
す。よ、徒らに紙頁を翻え、眼端底を  
貫くと雖も、もし此覺悟亦からむか、酒  
を飲みて歌ふに如かず。畢竟書之人をし  
て、大ひに爲すに如かず。畢竟書之人をし  
るせば也。  
故におぼれお、に此書を刊行するに當り  
其作の如何を問はずおをを見んとせらる  
く諸賢は宜ましく這般に覺悟を有し大ひに  
世上に爲す得られむことを度而こ、よ、囑  
托するもの也

菊堂臥人

郷雨善濁寄花笛機わも仙山橋涙  
 里の爰り語のの織がの境彦下川  
 の夕人世一東音娘國がふと  
 歎宵も片

二一〇〇九九八八七七  
 四七七六三九六二四〇四三八六

月冷苦忍遙温清雲一思離哀鐘朝  
 ときびれ情貧泥人嶋雞乃の露  
 雲情言の葉  
 情末世

七七七六六六五五五四四四  
 五三〇九五四〇九七二四一〇〇

片々花葉

哀観

微哀

柿の實

寫眞

怪々

あそれ

秋れ夜

唯一笑

四

一三二

一三九

一四二

一四五

一五二

一五五

一五六

一五八

一九一



汝も玄須らく世に立ゝむを欲せば先づ大  
慈大悲の念を發して而して以て世人の衆  
苦を救へ然らずんば生涯醒醒天理の定數  
よ於て盡さむ

### 詩人比天職

ある人間

うたびとよたみ      ほとむべた      きみのほとめと  
なよゝてやゐる      あなきみよ      なふをかほとむ

うた人答

とづかしやあら　　あまおとも　　あさでそおしぬ  
あさままやあな　　こころととも　　あゝろ縁はげむ

それ歌

人と生きて世に住みて　　世よ字た人とうたはれは  
照る日いたゞく其人の　　つとめは君よ重のりた

ありとあらゆる天地の　　うちの眺免と世の上よ  
うらびしおとの今むかし　　うたぬのそのと猶も亦

ひろた此世の字ちよある　　人の身は上世のうへを  
字たるはあると人の眼の　　及ばぬとあろ見えずえて

かほ之言とざる聞かざりし　　ことゝところのをちこちや  
ながたみぢのきくさくくの　　ものゝ秘密をあらとしつ

大ひなるおと小さをおと　　人よ教へは慰死て  
世をば救ひつ天地を　　泣かまべたあるはとめあり

ありとあらゆる天地の　　うちと外とを探りてえ  
れこるくまをく字よふおそ　　おれがなまべきつとめなれ

またある人間

つゝおたかあやほさなりれ　　君のうゝるえうゝのとし  
あゝ其うゝよえらべもて　　君のほと死を果すかな



うゝ人答

塵もほりて山をなし  
千里れ道もさゝ一夜

思ぬまゝのこもりなば  
いのでこと遂げならざらむ

ある人

る、さらば口をほぐみてやみぬべし  
さらばほと先よ はげ先のし

\* \* \* \* \*

はーがき

指折里數ふれば、とや三年よな里ぬ、一  
 年の秋つてるよ、いさ、かのえにし  
 にひかきて、筆を取里墨をあがしつ、折  
 々の感興胸に出たるしことのとしく、書  
 きしるしよりけるが、重なる年と俱よ、  
 いほかなほりく、て一百有余の數ある  
 りぬ。もどよりほらな爰まづをの字の  
 之、大方に見る小足らざるものなるべ  
 生を、孤村の寒月叢裡れ蟲聲まゝ幾何の  
 趣なたよまもあらずと、つひに集先て貳  
 卷となし、其名を草蘆集となむ名づり、  
 且、時雨、吹雪のほれとまをまはせ。

此まきまことと去年の夏おろ世に出さん  
と思ひまかどき、後れ後まで、今年にな  
まぬ。さるよても愚かなると、おのがあ  
ころよ、あゝるものを世よいだえて、人  
の眼に觸れし先むとは。

明治卅二年春の初花まだつばまず

こゆきしたまよ降としきるあろ

今井菊堂 ーるす

# 草 蘆 集

## 秋のわが庵

身とわれ菰のわが家立出で、ひろく深山  
の奥に遊び侍。おれづからなる柴の菴を  
おのがやどりと定めさりけるが、秋のわ  
が屋と一トしやの眺めもまえてそゝる心  
よ字とせさる。

吹くやさびしき秋風にし  
黄ば先るきびのゆら  
わら波字ちて晩稲田に  
鎌の聲すも音まをも

小 <sup>こ</sup> ひ	鳶 <sup>と</sup>	味 <sup>あじ</sup>	う	兎 <sup>うさぎ</sup>	月 <sup>つき</sup>	哀 <sup>あはれ</sup>	聞 <sup>き</sup>	い	垣 <sup>かき</sup>	今 <sup>いま</sup>
鷹 <sup>たか</sup>	と	よ	を	ら	と	を	ら	と	を	と
の	も	と	吸 <sup>す</sup>	の	夜 <sup>よ</sup>	照 <sup>て</sup>	花 <sup>はな</sup>	ば	も	埋 <sup>うづ</sup>
聲 <sup>こゑ</sup>	と	ゝ	ぬ	と	か	る	に	夕 <sup>ゆふ</sup>	咲 <sup>さ</sup>	む
を	咲 <sup>さ</sup>	先 <sup>ま</sup>	多 <sup>た</sup>	ま	お	な	添 <sup>そ</sup>	に	た	る
し	り	て	と	ば	お	り	る	鹿 <sup>しか</sup>	は	枯 <sup>か</sup>
の	る	歸 <sup>かへ</sup>	名 <sup>な</sup>	み	と	い	は	鳴 <sup>な</sup>	か	尾 <sup>お</sup>
ば	野 <sup>の</sup>	る	残 <sup>のこ</sup>	栗 <sup>り</sup>	づ	や	ゝ	た	乱 <sup>らん</sup>	と
せ	菊 <sup>きく</sup>	な	を	の	を	清 <sup>きよ</sup>	も	て	れ	あ
つ	に	と	ば	實 <sup>み</sup>	て	く			は	り
と				の					は	り

な	あ	人 <sup>ひと</sup>	を	夏 <sup>なつ</sup>	香 <sup>かほり</sup>	聞 <sup>き</sup>	聲 <sup>こゑ</sup>	春 <sup>はる</sup>	お	草 <sup>くさ</sup>	見 <sup>み</sup>
か	ゝ	の	ゝ	の	を	は	の	の	の	を	に
里 <sup>さと</sup>	さ	訪 <sup>ま</sup>	ま	夕 <sup>ゆふ</sup>	侍 <sup>し</sup>	と	袂 <sup>たもと</sup>	晨 <sup>あした</sup>	が	扉 <sup>かど</sup>	す
け	び	ひ	た	に	た	す	よ	よ	や	の	聞 <sup>き</sup>
る	し	來 <sup>く</sup>	月 <sup>つき</sup>	松 <sup>まつ</sup>	ぬ	を	あ	う	と	ま	に
か	や	る	よ	か	も	と	る	ぐ	と	ま	に
も	な	け	字 <sup>じ</sup>	々 <sup>々</sup>	れ	梅 <sup>うめ</sup>	ば	ひ	の	屋 <sup>や</sup>	深 <sup>み</sup>
我 <sup>われ</sup>	淋 <sup>しみ</sup>	と	侍 <sup>し</sup>	の	も	が	か	す	庵 <sup>いほり</sup>	こ	山 <sup>ま</sup>
が	し	ひ	を	無 <sup>な</sup>	枝 <sup>え</sup>	り	の	の	な	そ	な
庵 <sup>いほり</sup>	け	だ	と	く	の				を		る
の	れ	よ	も								

心を酒くさちあるを  
 さらばよさらは  
 君とものろとふ打連れは  
 包れとろふて鼓を  
 うゑんあ君と琴とを  
 涼玄き月君しらべか  
 峯にひいさきし音高  
 谿にこゝるて泣た  
 花はうなつときしを  
 雨とれをなつときしを  
 呼ぶ鹿は音をも  
 いはれをなつときしを  
 傳まはれをなつときしを  
 いはれをなつときしを

花だよあら君よ君  
 事はは足るあむ足らむ  
 さるを況もてや月のあ  
 兎も鳥をもろとにもに  
 清るを胸にぬぐはせて  
 酒と人住も里にのみ  
 飲み思るなばく不味  
 細き流た右にあつらむ  
 君よ來れあ知里つらむ  
 淋しあくも嬉しやあ  
 雨に  
 花と人住も里にのみ  
 酒と人住も里にのみ  
 飲み思るなばく不味  
 細き流た右にあつらむ  
 君よ來れあ知里つらむ  
 淋しあくも嬉しやあ

親露<sup>つ</sup> 有<sup>る</sup> 往<sup>ゆ</sup>星<sup>星</sup> 峯<sup>峯</sup> 浮<sup>浮</sup> 今<sup>今</sup>家<sup>家</sup> 妻<sup>妻</sup> 戀<sup>戀</sup> 幾<sup>幾</sup>野<sup>野</sup>  
 之<sup>之</sup> を<sup>を</sup> 來<sup>來</sup> を<sup>を</sup> の<sup>の</sup> 世<sup>世</sup> 宵<sup>宵</sup> に<sup>に</sup> も<sup>も</sup> し<sup>し</sup> 多<sup>多</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>  
 ち<sup>ち</sup> 抱<sup>だ</sup> 之<sup>之</sup> 此<sup>此</sup> 數<sup>數</sup> 嵐<sup>嵐</sup> を<sup>を</sup> の<sup>の</sup> 吾<sup>吾</sup> き<sup>き</sup> 此<sup>此</sup> き<sup>き</sup>  
 ち<sup>ち</sup> 寢<sup>ね</sup> 哀<sup>哀</sup> 雲<sup>雲</sup> 在<sup>在</sup> 又<sup>又</sup> 風<sup>風</sup> 旅<sup>旅</sup> こ<sup>こ</sup> 子<sup>子</sup> 友<sup>友</sup> 郷<sup>郷</sup> 山<sup>山</sup>  
 坐<sup>坐</sup> の<sup>の</sup> と<sup>と</sup> を<sup>を</sup> 伴<sup>伴</sup> 氣<sup>氣</sup> に<sup>に</sup> 此<sup>此</sup> し<sup>し</sup> も<sup>も</sup> も<sup>も</sup> と<sup>と</sup> ゆ<sup>ゆ</sup>  
 と<sup>と</sup> 新<sup>新</sup> 家<sup>家</sup> 枕<sup>枕</sup> さ<sup>さ</sup> 打<sup>打</sup> 空<sup>空</sup> を<sup>を</sup> 身<sup>身</sup> 新<sup>新</sup> 伴<sup>伴</sup> 遙<sup>遙</sup> な<sup>な</sup> 雲<sup>雲</sup> 花<sup>花</sup>  
 家<sup>家</sup> の<sup>の</sup> と<sup>と</sup> な<sup>な</sup> を<sup>を</sup> 洗<sup>洗</sup> を<sup>を</sup> 棧<sup>棧</sup> 徒<sup>徒</sup> か<sup>か</sup> つ<sup>つ</sup> 霞<sup>霞</sup> 谷<sup>谷</sup>  
 の<sup>の</sup> 里<sup>里</sup> が<sup>が</sup> 觀<sup>觀</sup> ひ<sup>ひ</sup> 曝<sup>曝</sup> ら<sup>ら</sup> な<sup>な</sup> の<sup>の</sup> 越<sup>越</sup>  
 有<sup>有</sup> り<sup>り</sup> つ<sup>つ</sup> 免<sup>免</sup> 侍<sup>侍</sup> し<sup>し</sup> に<sup>に</sup> る<sup>る</sup> し<sup>し</sup> き<sup>き</sup> て<sup>て</sup>

草

草<sup>草</sup> や<sup>や</sup> 宇<sup>宇</sup> 殊<sup>殊</sup> 樂<sup>樂</sup> 宇<sup>宇</sup> 心<sup>心</sup> 淋<sup>淋</sup> う<sup>う</sup> し<sup>し</sup> 草<sup>草</sup> 吹<sup>吹</sup>  
 を<sup>を</sup> ど<sup>ど</sup> ち<sup>ち</sup> に<sup>に</sup> し<sup>し</sup> ち<sup>ち</sup> こ<sup>こ</sup> し<sup>し</sup> を<sup>を</sup> づ<sup>づ</sup> の<sup>の</sup> 花<sup>花</sup>  
 褥<sup>褥</sup> 此<sup>此</sup> に<sup>に</sup> さ<sup>さ</sup> き<sup>き</sup> に<sup>に</sup> お<sup>お</sup> き<sup>き</sup> し<sup>し</sup> 免<sup>免</sup> 葉<sup>葉</sup> 去<sup>去</sup>  
 此<sup>此</sup> も<sup>も</sup> び<sup>び</sup> か<sup>か</sup> 喜<sup>喜</sup> も<sup>も</sup> う<sup>う</sup> の<sup>の</sup> て<sup>て</sup> 末<sup>末</sup> く<sup>く</sup>  
 新<sup>新</sup> 樂<sup>樂</sup> 去<sup>去</sup> な<sup>な</sup> ぶ<sup>ぶ</sup> り<sup>り</sup> ち<sup>ち</sup> ら<sup>ら</sup> 聲<sup>聲</sup> 沁<sup>沁</sup> 風<sup>風</sup>  
 枕<sup>枕</sup> 去<sup>去</sup> さ<sup>さ</sup> や<sup>や</sup> ぬ<sup>ぬ</sup> さ<sup>さ</sup> に<sup>に</sup> す<sup>す</sup> と<sup>と</sup> 木<sup>木</sup> こ<sup>こ</sup>  
 且<sup>且</sup> い<sup>い</sup> わ<sup>わ</sup> に<sup>に</sup> び<sup>び</sup> 喜<sup>喜</sup> や<sup>や</sup> 聽<sup>聽</sup> 此<sup>此</sup> 穩<sup>穩</sup>  
 が<sup>が</sup> や<sup>や</sup> が<sup>が</sup> 去<sup>去</sup> 去<sup>去</sup> び<sup>び</sup> 嬉<sup>嬉</sup> く<sup>く</sup> 葉<sup>葉</sup> か<sup>か</sup>  
 庵<sup>庵</sup> ま<sup>ま</sup> 庵<sup>庵</sup> あ<sup>あ</sup> の<sup>の</sup> し<sup>し</sup> ら<sup>ら</sup> も<sup>も</sup> に<sup>に</sup>  
 の<sup>の</sup> さ<sup>さ</sup> れ<sup>れ</sup> り<sup>り</sup> る<sup>る</sup> や<sup>や</sup> ら<sup>ら</sup> も<sup>も</sup> め<sup>め</sup>  
 る<sup>る</sup>

妻もわが子も抱へる  
我身の今と夢の現はる  
妻と孤屋のれと消え  
我子と家路の蔭をなす

燈火くは行燈の  
もとよ聞ゆとをたれて  
あこれに歎く妻の聲  
あげく小膝ようち臥て  
まやかく眠る面影と  
よまか我子れ竹太郎

轟く胸を押さぶ  
あろははりて肌寒  
つゝ、四邊をば

視やをのあまや晴渡る  
空にいとさゝか雲氣あくる  
降らむはかまの星れ影  
露おやどりて肌寒

七  
き  
妻

たをにまもあま、娶りけり妻の心置  
あく日を送りたりけるか、病れ床に打伏  
まて、何處の國ふか消えゆきなば、大方と  
いがで歎るで止むべきやと、おれをこれ  
らのあと思ぬよびでとに、いとよく哀に  
覺えつ、はひよ妻失せたりける人の心と  
思ひのかりて、かくはなむものま侍りぬ、

末期の水

あゝ、あゝ、これ世と去りゆくもの  
あゝ、此世と去りゆくもの  
あゝ、細きそれまゝかな  
閉ぢてふさぎて失するかな

息を吐く、あゝ、妻よ

しばしなまゝも妻よ君

とぢてふさげらる眼を  
あゝ、ひらけあし。

おの飲める紙切よ  
その細紙切よ  
おの飲める紙切よ  
おの飲める紙切よ

あゝ、吸る水を  
あゝ、吸る水を  
あゝ、吸る水を  
あゝ、吸る水を

聞きたる妻  
聞きたる妻  
聞きたる妻  
聞きたる妻

君よ、今わが妻  
君よ、今わが妻  
君よ、今わが妻  
君よ、今わが妻

飲むと得ぬか、吸ひて  
飲むと得ぬか、吸ひて  
飲むと得ぬか、吸ひて  
飲むと得ぬか、吸ひて

舌をうとす力なく  
舌をうとす力なく  
舌をうとす力なく  
舌をうとす力なく

おの、失せたりきうせよ  
おの、失せたりきうせよ  
おの、失せたりきうせよ  
おの、失せたりきうせよ

そや色青くうま白し  
あゝとるなさよはか  
かゝ其顔よ其顔は。

野の煙り

人、彼か、のりむり白煙  
る、と、かくるもれなるか  
彼の、彼の、消ゆるるるな。

失せてゆり、あゝ、妻よ  
とてても失せたる身よ  
身にてもあれば失せよ

あゝ、われ今を思はざむ。  
おゝ、思ふに思ふまじ  
されど、何故も、あゝ、妻よ  
たみに生れたでうせに  
薬に生れたでうせに

た々よわが妻あ  
くすしのもとあ  
うせよしのなれば  
あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、  
つ日かひし報い今と來よ



彼 彼か 隄たき う  
の の ろ せ  
體むくろ 生いの り け  
と 命ち り け  
と と 里 る  
の お な ろ  
あ と あ な  
く さ 、 消  
も ら 生いの え  
に 命ち に け

か お ひ あ  
を 、 く 、  
が 此この ろ か  
此この 灰は と の  
世よ よ い 厚あつ  
の 此この づ き  
名な 骨ほね お 冴やわ  
残り よ 今いま 和わか  
あ 何い き  
る 處こ

字 加 骨ほね こ  
ら せ な れ  
よ が り け  
あ や り 頭かぶ  
と さ る の  
よ し よ ち  
る き わ と  
前 唇くちびる の こ  
齒 の れ け  
な り

お 今 宵よ 夜よ  
、 と の 半は  
白しろ 骨ほね  
と れ 斯か に  
あ も く か  
を い う く  
る と せ ち  
か 深 っ り  
な き て

朝の白骨

彼かれ の 煙け 往ゆ  
の 、 字 け  
姿すがた 彼かれ す よ  
は の ら ゆ  
消き 燃も ぎ け  
に ゆ 火 は  
べ る 火ひ 燃も せ  
か の 煙 ぬ  
ち に

あ 來ま  
、 里 手  
を と 失う  
と 里 去  
て 誘さ  
ぬ ら 妻  
む。

なげのそとえやないか  
 げのそとえやないか  
 と埋も失せよるもの  
 せよるものなせん  
 ば  
 墓よまたほ糸にほるべ  
 きらんか  
 郷にあり何べ處いづ  
 こなる  
 骨となる  
 神の  
 今手もとんやなほ  
 遊ぶあな  
 蓮の一枝  
 人との此葉にかなく  
 露れ  
 なるなり

今彼の姿も消え  
 江のつたて  
 手ひりさ、ばや  
 此の姿も此の文字に  
 らあかれが心と此處  
 あり  
 いざや此枝よ水さ  
 してか  
 あがく眺めを慰  
 らんか  
 彼れこれあろとを  
 ゆる  
 加れれあろとを  
 ゆる  
 つせふなかりし  
 哀あはれ  
 一七

我	己	き	か	な	い	あ	情	怒	顔
これ	み	み	、	さ	く	と	あ	立	よ
頼	の	は	此	々	ば	れ	き	い	の
み	妻	永	花	な	く	や	の	せ	く
ぬ	を	ら	よ	の	我	か	も	ま	の
花	ば	く	蓮	り	を	れ	已	焦	び
れ	ま	散	花	し	恨	は	が	燥	ら
君	も	り		あ	む	今	身	て	れ
	里	ゆ		、	ら	と	の	侍	お
	に	の		悔	む	ま		と	き
	せ	で		し	も			く	

主無き衣

あ	ら	な	た	の	な	や	無	の	里	々	里
あ	妻	い	あ	来	彼	お	う	あ	妻	い	あ
、	よ	か	、	里	と	、	、	、	ま	妻	よ
ま	妻	よ	彼	、	こ	此	て	ま	よ	風	時
、	よ	風	情	な	を	遺	う	ま	わ	情	に
が	が	れ	此	を	着	物	い	が	が	れ	此
た	津	あ	、	来	我	か	て	た	津	あ	、
見	ま	り	も	里	里	に	此	見	ま	り	も
せ	よ	、	と	け	に	せ	ん	せ	よ	、	と
よ	や	な		を				よ	や	な	

深山路

野の越え 霧をき 流るる 見ゆる  
 山越え 霧をき 流るる 見ゆる  
 小山路 霧をき 流るる 見ゆる  
 越え 霧をき 流るる 見ゆる  
 唯ひ越 霧をき 流るる 見ゆる  
 紅て 霧をき 流るる 見ゆる  
 ば 霧をき 流るる 見ゆる

思ひや 先と 我の胸を  
 思ひや 先と 我の胸を  
 思ひや 先と 我の胸を  
 思ひや 先と 我の胸を  
 思ひや 先と 我の胸を  
 思ひや 先と 我の胸を  
 思ひや 先と 我の胸を  
 思ひや 先と 我の胸を

悲かな 妻亡し 思ひや 先と 我の胸を  
 思ひや 先と 我の胸を 思ひや 先と 我の胸を  
 思ひや 先と 我の胸を 思ひや 先と 我の胸を  
 思ひや 先と 我の胸を 思ひや 先と 我の胸を  
 思ひや 先と 我の胸を 思ひや 先と 我の胸を  
 思ひや 先と 我の胸を 思ひや 先と 我の胸を  
 思ひや 先と 我の胸を 思ひや 先と 我の胸を  
 思ひや 先と 我の胸を 思ひや 先と 我の胸を

海 <sup>うみ</sup> 谿 <sup>み</sup>	う	頭 <sup>は</sup>	木 <sup>き</sup>	下 <sup>した</sup>	白 <sup>しろ</sup>	四 <sup>よ</sup>	彌 <sup>や</sup>	拍 <sup>ひ</sup>	た	と
に	よ	た	乃 <sup>の</sup>	屯 <sup>とん</sup>	を	人 <sup>ひと</sup>	作 <sup>つく</sup>	子 <sup>こ</sup>	け	れ
あ	ひ	ふ	葉 <sup>は</sup>	杵 <sup>きね</sup>	廻 <sup>めぐ</sup>	五 <sup>ご</sup>	が	そ	ば	て
た	ゝ	小 <sup>こ</sup>	を	面 <sup>おもて</sup>	り	人 <sup>ひと</sup>	庭 <sup>にわ</sup>	ろ	可 <sup>か</sup>	崩 <sup>くずれ</sup>
へ	き	唄 <sup>うた</sup>	打 <sup>う</sup>	と	侍 <sup>しやく</sup>	み	れ	へ	笑 <sup>わら</sup>	れ
て	て	の	つ	五 <sup>ご</sup>	そ	ぎ	初 <sup>はつ</sup>	て	や	て
聲 <sup>こゑ</sup>	音 <sup>ね</sup>	山 <sup>やま</sup>	よ	月 <sup>つき</sup>	を	ひ	む	米 <sup>こめ</sup>	と	ゆ
す	清 <sup>きよ</sup>	よ	異 <sup>い</sup>	雨 <sup>あめ</sup>	く	だ	ま	手 <sup>て</sup>	ん	る
ゝ	く	鳴 <sup>な</sup>	ら	の	と	ま	ろ	づ	く	おん
し。	り		す。				る。	き	と	か

思 <sup>おも</sup>	聲 <sup>こゑ</sup>	羽 <sup>は</sup>	賤 <sup>しん</sup>	て。	い	と	つ	友 <sup>とも</sup>	聲 <sup>こゑ</sup>	雲 <sup>くも</sup>
ひ	も	音 <sup>ね</sup>	が	今 <sup>いま</sup>	と	ひ	さ	呼 <sup>よ</sup>	と	井 <sup>い</sup>
て	牙 <sup>さ</sup>	つ	伏 <sup>ふ</sup>	昔 <sup>むかし</sup>	ひ	が		ぶ	谷 <sup>や</sup>	を
ぬ	江 <sup>え</sup>	ゆ	家 <sup>や</sup>	の	め	る		猿 <sup>さる</sup>	間 <sup>ま</sup>	の
き	ゆ	々	れ	山 <sup>やま</sup>	片 <sup>かた</sup>	田 <sup>でん</sup>		の	ま	々
や	く	た	門 <sup>かど</sup>	賤 <sup>しん</sup>	夫 <sup>ふ</sup>	舎 <sup>しゃ</sup>		音 <sup>ね</sup>	し	る
天 <sup>あめ</sup>	月 <sup>つき</sup>	水 <sup>みづ</sup>	よ	夫 <sup>お</sup>	う	さ		た	の	山 <sup>やま</sup>
地 <sup>ち</sup>	の	鳥 <sup>とり</sup>	立 <sup>た</sup>	う	さ	へ		か	ば	鳥 <sup>とり</sup>
れ。	宵 <sup>よひ</sup>	の	つ	へ	る	ぬ		し。	れ	の
				聞 <sup>き</sup>	し	を		て		

彌 <small>み</small> 再 <small>ふた</small>	更 <small>か</small> 先 <small>あ</small> 同 <small>た</small> う	聞 <small>き</small> の彌 <small>や</small>	こ
作 <small>さ</small> び	ひぐじふ	れけと作 <small>さ</small>	れ
と三 <small>み</small>	玄 <small>ま</small> りくひ	のやとは	や
高 <small>た</small> 度 <small>た</small>	新 <small>あ</small> 聲 <small>こゑ</small> 終 <small>お</small>	語 <small>こと</small> 世 <small>よ</small> 歌 <small>うた</small> 聲 <small>こゑ</small>	晩 <small>ま</small> 稻 <small>い</small>
た更 <small>か</small>	米 <small>こめ</small> を <small>を</small> れ	られひを	れ
聲 <small>こゑ</small> ひ	玄 <small>ま</small> 張 <small>ひ</small> ば	む人 <small>ひと</small> ぬと	れ
を <small>を</small> は	今 <small>いま</small> 上 <small>あ</small> み	國 <small>くに</small> 語 <small>こと</small> いり	早 <small>あ</small> お
ま、も	らげしも	のれとあ	お
ふも	げりも	のれとあ	お
	る。	幸 <small>さい</small> や高 <small>た</small> げ	な
		わくつ	し
		れに	

再 <small>ふた</small> 米 <small>こめ</small> や	濱 <small>はま</small> と光 <small>ひかり</small> 隈 <small>かま</small>	打 <small>う</small> 岸 <small>き</small> 松 <small>まつ</small> 遠 <small>とほ</small>
びを、	邊 <small>へ</small> るふあ	隔 <small>へ</small> に々く
更 <small>か</small> 精 <small>しつ</small> 打 <small>うち</small>	にかくく	げち枝 <small>え</small> き
ぬげり	語 <small>こと</small> 幽 <small>かすか</small> み照 <small>あ</small>	ららさこ
るてた	るふ玄 <small>ま</small> す	れ侍 <small>さむらい</small> そゆ
新 <small>あ</small> うて	千 <small>ち</small> 韻 <small>いん</small> 姿 <small>すがた</small> 月 <small>つき</small>	しくぬる
米 <small>こめ</small> ち	鳥 <small>とり</small> くお影 <small>かげ</small>	水 <small>みづ</small> 螢 <small>ぼたる</small> 嵐 <small>あらし</small> 浪 <small>なみ</small>
はあぬ	聲 <small>こゑ</small> 音 <small>ね</small> あに	の火 <small>ひ</small> な音 <small>ね</small>
げか	は	泡 <small>あわ</small> とる
て立		
侍		

熱<sup>あつ</sup>あひ  
愛<sup>あひ</sup>げ  
涙<sup>なみだ</sup>て  
を<sup>を</sup>う  
こ<sup>こ</sup>た  
ば<sup>ば</sup>ひ  
ち<sup>ち</sup>ぬ  
つ<sup>つ</sup>ろ  
く<sup>く</sup>  
と

「<sup>すめら</sup>開<sup>ひ</sup>ひ  
御<sup>くに</sup>て  
の<sup>たら</sup>ら  
尊<sup>を</sup>よ  
皆<sup>みな</sup>の  
衆<sup>ひび</sup>」

「<sup>う</sup>拍<sup>ひ</sup>く  
子<sup>こ</sup>ら  
ひ<sup>ひ</sup>く  
ら<sup>ら</sup>  
を<sup>を</sup>よ  
皆<sup>みな</sup>の  
衆<sup>ひび</sup>」

音<sup>ね</sup>を  
頭<sup>かぶ</sup>に  
と<sup>と</sup>  
金<sup>かね</sup>を  
は<sup>は</sup>  
栗<sup>くり</sup>を  
就<sup>つ</sup>に  
ぬ<sup>ぬ</sup>  
ほ<sup>ほ</sup>  
げ<sup>げ</sup>  
て

「<sup>あろじ</sup>主<sup>を</sup>い  
の<sup>を</sup>ひ  
請<sup>こ</sup>ば  
求<sup>もと</sup>め  
よ<sup>よ</sup>  
し<sup>し</sup>  
ん<sup>ん</sup>  
言<sup>こと</sup>ひ  
ひ<sup>ひ</sup>  
そ<sup>そ</sup>  
先<sup>ま</sup>  
ん<sup>ん</sup>」

「<sup>あ</sup>あ  
十<sup>じゅう</sup>日<sup>にち</sup>は  
に<sup>に</sup>  
一<sup>いち</sup>度<sup>ど</sup>  
風<sup>かぜ</sup>吹<sup>ふ</sup>く  
の<sup>の</sup>  
國<sup>くに</sup>」

「今あるは御代よこそ重なるれ  
君主と御代よ神の人のらざる  
八千代百千代かゝらざる  
礎かたき神の國」。

「土<sup>ち</sup>地<sup>ち</sup>と人<sup>ひたり</sup>と殖<sup>ふ</sup>え増<sup>まさ</sup>り  
朝<sup>あさ</sup>日<sup>ひ</sup>れ光<sup>ひかり</sup>と秋<sup>あき</sup>津<sup>つ</sup>や清<sup>きよ</sup>く  
草<sup>くさ</sup>木<sup>き</sup>の茂<sup>しげ</sup>る秋<sup>あき</sup>津<sup>つ</sup>州<sup>しゅう</sup>」。

「あらあしおくれも尊とけれ  
うさひあさおくれも皆<sup>みな</sup>の衆<sup>しゅう</sup>けれ  
住<sup>すま</sup>かゝる尊<sup>たう</sup>たか神<sup>かみ</sup>の國<sup>くに</sup>の幸<sup>さいち</sup>を」。

いきざとあつたへてもろ人  
きねを拍<sup>ひ</sup>子<sup>こ</sup>よ音<sup>ね</sup>をそるへ  
天<sup>あま</sup>よも聞<sup>きこ</sup>ぬ地<sup>ち</sup>よもまよ  
ひ々た渡<sup>わた</sup>らむあばか  
ひ々た渡<sup>わた</sup>らむあばか

「そ先<sup>まづ</sup>ら御<sup>み</sup>國<sup>くに</sup>の尊<sup>たう</sup>さと  
草<sup>くさ</sup>よ黄金<sup>おうごん</sup>の雫<sup>しゆく</sup>就<sup>なり</sup>さ  
神<sup>かみ</sup>れ惠<sup>めぐみ</sup>れ深<sup>ふか</sup>愛<sup>あい</sup>ゆえ  
賤<sup>せん</sup>が伏<sup>ふせ</sup>屋<sup>や</sup>も榮<sup>さか</sup>ゆえ

彼<sup>か</sup>の姿<sup>すがた</sup>

見<sup>み</sup>よや哀<sup>あは</sup>れ彼の姿<sup>すがた</sup>がよ  
君<sup>きみ</sup>とまらすや彼の姿<sup>すがた</sup>がよ



泣きぬてこゝと死くも  
悔わが力ちからけれ。

悲かな哀あはららずや年とし老おいて

糧かて破やぶ枝つるををれににすすああららずすやや年とし老おいて

答こたむむるるななるるばばわわかかむむままじじしし

かかれれののがが身みななるるばばわわかかむむままじじしし

悲かなままかかららずすややああららずす君きみよ

哀あはれれああららずすやや彼かのの姿すがた  
西にしよよ往ゆたたとと里さとててゆゆららくくとと

東あづまよよ往ゆたたとと里さとててゆゆららくくとと

ああららずすやや彼かのの姿すがた  
ああららずすやや彼かのの姿すがた

秋の朝

其一

ささびびししきき秋あきのの朝あさああららずすやや彼かのの姿すがた

尾御前

日念白か墨  
送珠たぐの  
りよ腕か衣  
たかをたに  
まら椽髪身  
ふめのをを  
尼て實切や  
れ唯れ捨つ  
る獨て！  
里里、

鐘疾さ  
の曉くし  
東音告軒起た  
れ遠ぐの出秋  
空くる端での  
の聞き山、朝  
明ゆ寺で月眺  
々あ地影むげ  
そり淡れよ  
先くば  
て。

其三

疾さ  
くま  
見起た  
出秋二  
での  
朝  
打か  
見みび  
れに  
白ば  
し

夜明川  
山鳥邊夕  
れのよれ  
彼一り雲  
方ト立ハ  
よ二つ影  
鳴夕霧も  
たツ白無  
そ先く  
て。

山邊はるの松蔭の  
庵に姿をのらせて  
晨と谷間の水を吸み  
夕に月の影を浴び  
いとものどけな姿まつ。

鐘を打ちほ、念佛の  
聲はつねく絶間なく  
経をよみほ、あでやのよ  
たましく開ゆ小うたよと  
あをを世捨しひきあり。  
なさけなきかやあま御前

年のいとわかしく姿よは  
いと美えや麗えや  
いとやさしく限り無き  
情のあもるあるを。

年の経るも世は老ひて  
さへとへ麓朽るども  
幾世経るも傳ふらめり。  
あせに今ともしまがたり。

余りのあど、人や知る  
そいろの哀れよ、堪へか  
おとづるもの、あまは生

あまの佛にゆかばは  
あまの涙をふるぬとぞ。

いぶかきいやあま御前  
何を恨みて其風情  
顔も容も人よ先で  
年もいとわろくして  
殊も勝るなさらあり。

まがたに優き字るしく  
ぬかたふものを何故よ  
斯かるさまの問ぬあま  
ほまとの胸に空手をあて  
これも戀路の迷ひ果てし。

古き戀人

ふるき昔を思ひ出で  
むろし聖者を訪きて  
胸と心を字のいば  
さてもやさきやゆかまやな。

おろの底と清らかよ  
塵無き鏡の濁れな  
池の清水に異らな  
さながら海の如くな  
胸の字ちよと一ト星の

底昔む戀	聲あ歌か	る水月渠 <small>がね</small>
れ聖あま	とらふれ	るのそが
底者しに	自、初 <small>はつ</small> が	は流 <small>ながれ</small> 胸
あ <small>ひ</small> の聖 <small>か</small>	かた音 <small>ね</small> 心	聞のつよ
そ心者 <small>り</small> な	ら音 <small>ね</small> とに	は音 <small>ね</small> れは
戀な <small>の</small> や	遠 <small>の</small> 響 <small>ひ</small> 天 <small>あめ</small>	すとど青 <small>あを</small>
むる胸 <small>なつか</small>	ざく々地 <small>ち</small>	知遠 <small>とほ</small> 濁 <small>にごり</small> 空 <small>くら</small>
り <small>の</small> ま	あもど <small>の</small>	らくあ <small>の</small>
を。	る。まも	ぬる
	あ	と
	る	そ

情いあ謂 <small>い</small>	字あ浮聞	天 <small>あま</small> 宛 <small>あだが</small> 墨 <small>すみ</small>
のともへ	たる世け	はもの
ひもりる	世とをば	御 <small>み</small> 晴 <small>は</small> 色
い熱 <small>あつ</small> 居 <small>を</small> 言 <small>こ</small>	を悲 <small>を</small> と奥 <small>おく</small>	空 <small>くら</small> れだ
き々 <small>ら</small> 葉 <small>は</small>	かまらに	にても
あくぬに	こきぬと	似雲 <small>に</small> さ
ら温 <small>あたた</small> と血	は音 <small>ね</small> 聲 <small>こゑ</small> か	たのら
ぬけ更 <small>また</small> と	聲 <small>こゑ</small> をのら	り無 <small>な</small> あ
なきよ涙	も帯 <small>おし</small> し <small>は</small> と	々 <small>た</small> く
ま。	し <small>は</small> つて	る。

朝

比露

麗し

い

や

な

朝

露

の

の

白き

緑

朝

日

れ

影

よ

う

る

と

朝

日

れ

影

よ

う

る

と

た

。

咲け

や

そ

と

萩

そ

の

花

の

い

咲り

や

朝

顔

ろ

れ

は

ぼ

み

ぎ

晨

朝

の

露

の

消

え

ぬ

字

ち

鐘

比

聲

晨

朝

の

露

の

消

え

ぬ

哀

鶏

一羽なれど  
も  
雞の  
姿を狂  
とせ  
て

きよくと  
と  
峯  
比  
松  
風

今としも  
近  
く  
聞  
ぬ  
哀  
さ  
の  
一  
ト  
は  
加  
り  
悲  
ま  
や  
あ  
涙  
を  
出  
づ

さびし  
や  
な  
秋  
の  
夜  
の  
鐘  
な  
ん  
と  
な  
く  
心  
沈  
み  
て  
あ  
は  
れ  
や  
な  
胸  
よ  
波  
立  
づ

後 <small>あ</small> 叫 <small>き</small> め <small>め</small> ま身歌を互 <small>た</small> そ	稻 <small>い</small> 妻 <small>ま</small> 思
れ <small>れ</small> び <small>び</small> と <small>と</small> ば <small>ば</small> を <small>を</small> ぬ <small>ぬ</small> 空 <small>そ</small> ひ <small>ひ</small> の	穂 <small>ほ</small> の <small>の</small> ひ
小 <small>こ</small> て <small>て</small> 里 <small>り</small> さ <small>さ</small> ば <small>ば</small> や <small>や</small> り <small>り</small> に <small>に</small> 時	を <small>を</small> 免 <small>ま</small> 給
足 <small>あ</small> 狂 <small>き</small> 咬 <small>く</small> く <small>く</small> ふ <small>ふ</small> 否 <small>いな</small> は <small>は</small> 祝 <small>い</small> を	探 <small>た</small> と <small>と</small> へ
に <small>に</small> ぬ <small>ぬ</small> る <small>る</small> 隙 <small>ひ</small> る <small>る</small> や <small>や</small> や <small>や</small> ひ <small>ひ</small> と	糸 <small>いと</small> り <small>り</small> な
な <small>な</small> を <small>を</small> て <small>て</small> に <small>に</small> 之 <small>の</small> 黒 <small>くろ</small> が <small>が</small> よ <small>よ</small> り	出 <small>い</small> と <small>と</small> を
げ <small>げ</small> と <small>と</small> い <small>い</small> と <small>と</small> せ <small>せ</small> ね <small>ね</small> て <small>て</small> る <small>る</small> 津	し <small>し</small> 一 <small>ひと</small> と
や <small>や</small> 里 <small>り</small> と <small>と</small> び <small>び</small> 飛 <small>と</small> に <small>に</small> 歌 <small>うた</small> あ <small>あ</small> ま	り <small>り</small> ト <small>と</small> 里
里 <small>り</small> を <small>を</small> 速 <small>はや</small> 去 <small>い</small> 出 <small>い</small> と <small>と</small> ひ <small>ひ</small> び <small>び</small> ど	る <small>る</small> も <small>も</small> な
て <small>て</small> ば <small>ば</small> く <small>く</small> 里 <small>り</small> て <small>て</small> た <small>た</small> て <small>て</small> 里	と <small>と</small> る
ぬ <small>ぬ</small> 、 <small>、</small> り <small>り</small> は	れ

黒園 <small>くろ</small> の <small>の</small> わ <small>わ</small> 餅 <small>もち</small> 牡 <small>ま</small> を <small>を</small> わ	胃 <small>い</small> か <small>か</small> 姿 <small>すがた</small> 今 <small>いま</small> 未 <small>いま</small> 昨 <small>きのう</small> 飛 <small>と</small>
た <small>た</small> の <small>の</small> 、 <small>、</small> を <small>を</small> 鶏 <small>とり</small> づ	の <small>の</small> を <small>を</small> と <small>と</small> と <small>と</small> だ <small>だ</small> 日 <small>ひ</small> び
小 <small>こ</small> う <small>う</small> 無 <small>な</small> ば <small>ば</small> 牝 <small>め</small> か	腑 <small>はら</small> と <small>と</small> 何 <small>なに</small> 一 <small>ひと</small> 二 <small>ふた</small> れ <small>れ</small> ゆ
猫 <small>ねこ</small> ち <small>ち</small> 情 <small>なさけ</small> わ <small>わ</small> 鶏 <small>とり</small> 二 <small>ふた</small> に	よ <small>よ</small> 今 <small>いま</small> 處 <small>ところ</small> 羽 <small>はね</small> 羽 <small>はね</small> 夕 <small>ゆふ</small> く
と <small>と</small> あ <small>あ</small> よ <small>よ</small> さ <small>さ</small> と <small>と</small> 時 <small>とき</small>	影 <small>かげ</small> ま <small>ま</small> 彼 <small>かの</small> の <small>の</small> ま <small>ま</small> 今 <small>いま</small> 様 <small>さま</small>
し <small>し</small> る <small>る</small> つ <small>つ</small> り <small>り</small> も <small>も</small> の	を <small>を</small> も <small>も</small> 何 <small>なに</small> 牝 <small>め</small> て <small>て</small> 日 <small>ひ</small> ふ
の <small>の</small> 花 <small>はな</small> は <small>は</small> れ <small>れ</small> て <small>て</small> る <small>る</small> 前 <small>まへ</small>	と <small>と</small> 黒 <small>くろ</small> 處 <small>ところ</small> 雞 <small>とり</small> の <small>の</small> ゐ
び <small>び</small> 蔭 <small>かげ</small> な <small>な</small> あ <small>あ</small> と <small>と</small> な	、 <small>、</small> 猫 <small>ねこ</small> なり <small>なり</small> 朝 <small>あさ</small> を
ぬ <small>ぬ</small> に <small>に</small> さ <small>さ</small> り <small>り</small> も <small>も</small> り	む <small>む</small> の <small>の</small> し <small>し</small> り <small>り</small> を
つ <small>つ</small> よ <small>よ</small> け <small>け</small> に <small>に</small> た	ら <small>ら</small> る <small>る</small> や
る <small>る</small>	を <small>を</small> な
が	

ちぎれし羽毛を便りは、  
 探りもとしめて呼ぶと消ゆと  
 免さる影か途に消ゆし  
 あさ穂け無き胸になあそめし  
 稲の穂粒はけき胸になあそめし  
 末だの穂粒はけき胸になあそめし  
 失せ影などなきに胸になあそめし  
 嘆くをとなきに胸になあそめし  
 ありしを哀れ後さよと

離れ嶋

千里一碧無際無邊の大海よ、ほのろ見  
 ゆる離れ島。今と流笛の音も絶えて、日

々お波立繁々をど、去ぬる古昔の珍げよ、  
 人と皆斯く言をにける。

海邊はる間に見わさせば  
 ゆる浪間よちら鳴くと  
 幽かよ見ゆる離れら先  
 そも彼島といか暮ぬらむ。  
 彼土といかに暮ぬらむ。  
 晨よ朝日昇り出でて  
 夕に山は端に入りて  
 其日共日終ぬるあて  
 花の野山に充満てる  
 鳥の終日唄ふかある。



戀母父	或 <sup>あ</sup> 家 <sup>い</sup> 道 <sup>みち</sup> 尊 <sup>たう</sup> 賤 <sup>ひや</sup>	都露鳥華 <sup>はな</sup>
玄 <sup>ま</sup> よに	はに邊 <sup>へ</sup> きし	戀にをよ
花 <sup>はな</sup> 捨 <sup>す</sup> わ	貧 <sup>み</sup> 傲 <sup>おご</sup> に人 <sup>ひと</sup>	玄 <sup>ま</sup> 身 <sup>み</sup> 愛 <sup>あい</sup> 日 <sup>ひ</sup>
姉 <sup>あね</sup> らか	し笑 <sup>わら</sup> 歎 <sup>なげ</sup> も人 <sup>ひと</sup>	むをで遊
やるれ	花 <sup>はな</sup> と <sup>と</sup> き <sup>き</sup> 數 <sup>かず</sup> も	人 <sup>ひと</sup> お、ふ
弟 <sup>あに</sup> 稚 <sup>ち</sup> し	人 <sup>ひと</sup> 富 <sup>とみ</sup> 世 <sup>よ</sup> 多 <sup>た</sup> あ	も花 <sup>はな</sup> の <sup>の</sup> 人 <sup>ひと</sup>
お見 <sup>み</sup> 子 <sup>こ</sup>	やにをくら	あ語 <sup>ことば</sup> 聲 <sup>こゑ</sup> ほ
なも	あ倦 <sup>あ</sup> 唧 <sup>唧</sup> む	り。らにら
花 <sup>はな</sup> ほ	る。花 <sup>はな</sup> ち	ひ泣 <sup>なみ</sup> 死 <sup>し</sup>
かり		て花 <sup>はな</sup>
つ		

月	そ	と	晝 <sup>ひる</sup> 朝 <sup>あさ</sup> 老 <sup>おきな</sup>	か	女 <sup>をんな</sup> 冬 <sup>ふゆ</sup> 夏 <sup>なつ</sup> 春 <sup>はる</sup>
に	の	あ	夕 <sup>ゆふ</sup> ひ	よ	童 <sup>わらわ</sup> ととと
樂	日 <sup>ひ</sup> き	宵 <sup>よ</sup> 野 <sup>の</sup> も		と	と雪 <sup>ゆき</sup> 涼 <sup>すず</sup> あ
し	を	男 <sup>おとこ</sup> と邊 <sup>へ</sup> 若 <sup>わか</sup>		花 <sup>はな</sup>	住 <sup>す</sup> ぬしり
む	いと	はよき		稚 <sup>ち</sup> み	るきな
人	う	女 <sup>をんな</sup> 寢 <sup>い</sup> 草 <sup>くさ</sup> も		兒 <sup>こ</sup> ぬ	日 <sup>ひ</sup> 風 <sup>かぜ</sup> ん
の	に	子 <sup>こ</sup> る	刈 <sup>かり</sup> 諸 <sup>もろ</sup>	れ	る吹 <sup>ふ</sup> 秋 <sup>あき</sup>
あ	送 <sup>おく</sup> と	か	り共 <sup>とも</sup>	泣 <sup>なみ</sup> か	あきほ
里	る	いな	てよ	く	らてら
	ら			や	免 <sup>めん</sup> らむ
	む。			あ	る。

臥<sup>ふ</sup>別<sup>わか</sup>れ  
床<sup>と</sup>に告<sup>つ</sup>げ  
病<sup>や</sup>先<sup>し</sup>る  
友<sup>とも</sup>あ  
た<sup>ら</sup>や。

老<sup>おい</sup>い  
を<sup>を</sup>前<sup>まへ</sup>に  
去<sup>さ</sup>り  
後<sup>あと</sup>に  
し<sup>し</sup>て

此<sup>こゝ</sup>世<sup>よ</sup>を  
妻<sup>つま</sup>や  
子<sup>こ</sup>を  
残<sup>のこ</sup>す  
人<sup>ひと</sup>

可<sup>い</sup>愛<sup>い</sup>れ  
何<sup>なに</sup>處<sup>ところ</sup>か  
去<sup>さ</sup>り  
ら<sup>ら</sup>め。

時<sup>とき</sup>に  
悲<sup>かな</sup>し  
く  
懐<sup>なつ</sup>く  
と  
あ<sup>あ</sup>ら  
む

い  
と  
も  
し  
き  
こ  
と  
あ  
ら  
ん  
か  
な

嬉<sup>うれ</sup>し  
ま  
た  
お  
も  
あ  
ら  
ん  
か  
な

悲<sup>かな</sup>し  
ま  
た  
お  
も  
あ  
ら  
ん  
か  
な

心<sup>こゝろ</sup>に  
狂<sup>くる</sup>ぬ  
お  
も  
あ  
ら  
ん  
か  
な

通<sup>とほ</sup>ぬ  
船<sup>ふね</sup>路<sup>ぢ</sup>も  
あ  
り  
け  
ら  
免<sup>ま</sup>れ  
ば

往<sup>ゆ</sup>き  
つ  
歸<sup>かえ</sup>り  
つ  
す  
る  
ら  
免<sup>ま</sup>れ  
ば

止<sup>とど</sup>ま  
る  
も  
数<sup>かず</sup>多<sup>おほ</sup>く  
ら  
む

彼<sup>かの</sup>士<sup>し</sup>と  
人<sup>ひと</sup>の  
し  
げ  
か  
ら  
む

見<sup>み</sup>知<sup>し</sup>ら  
ぬ  
人<sup>ひと</sup>の  
多<sup>おほ</sup>く  
ら  
む

あ  
の  
浪<sup>なみ</sup>立<sup>た</sup>は  
海<sup>うみ</sup>の  
水<sup>みづ</sup>

君<sup>きみ</sup>と  
知<sup>し</sup>ら  
ぬ  
語<sup>ことば</sup>れ  
あ  
ら  
む

寄<sup>よ</sup>せ  
は  
返<sup>かへ</sup>し  
は  
す  
る  
あ  
ら  
む

そ  
も  
彼<sup>かの</sup>嶋<sup>しま</sup>と  
い  
か  
な  
ら  
む

さ  
と  
を  
彼<sup>かの</sup>嶋<sup>しま</sup>内<sup>うち</sup>外<sup>そと</sup>と

戀人彼<sup>か</sup>晨<sup>あした</sup>其<sup>し</sup>を  
 てよ處<sup>こ</sup>朝<sup>あした</sup>を  
 ぬ差<sup>わか</sup>よ日<sup>ひ</sup>が  
 も別<sup>わか</sup>ち暴<sup>あ</sup>の彼<sup>か</sup>  
 ののるい土<sup>つち</sup>  
 もあ、やれ  
 知<sup>し</sup>ら波<sup>なみ</sup>照<sup>あ</sup>慣<sup>な</sup>  
 らざとれどあ  
 ぬれなく  
 なばく  
 里。

彼都<sup>みやま</sup>の  
 の土<sup>つち</sup>人<sup>ひと</sup>  
 知<sup>し</sup>ら  
 戀<sup>こひ</sup>なら  
 らむ  
 や。

さらば  
 彼<sup>か</sup>土<sup>つち</sup>  
 よ戀<sup>こひ</sup>な  
 きや  
 かに  
 有<sup>あ</sup>る  
 が  
 ら  
 や。

そはま  
 いま  
 とく  
 いふ  
 ら  
 ざ  
 や。

老人<sup>らうじん</sup>  
 いま  
 有<sup>あ</sup>る  
 が  
 ら  
 や。

彼<sup>か</sup>月<sup>つき</sup>鳥<sup>とり</sup>  
 方<sup>かた</sup>もも  
 此<sup>こ</sup>昇<sup>のぼ</sup>叫<sup>こゑ</sup>  
 方<sup>かた</sup>里<sup>り</sup>べ  
 通<sup>かよ</sup>はど  
 ふ日<sup>ひ</sup>花<sup>はな</sup>  
 船<sup>ふね</sup>れ吹<sup>ふ</sup>  
 とてけ  
 無<sup>な</sup>れど  
 くと

人野<sup>ひとの</sup>そ  
 にあも邊<sup>へ</sup>  
 悲<sup>かな</sup>里<sup>り</sup>彼<sup>か</sup>  
 玄<sup>げん</sup>山<sup>さん</sup>嶋<sup>じま</sup>  
 たあそれ水<sup>みづ</sup>  
 あり人<sup>ひと</sup>む音<sup>ね</sup>  
 と川<sup>がは</sup>の答<sup>こた</sup>た  
 のあある  
 ちれ里<sup>り</sup>聲<sup>こゑ</sup>  
 玄<sup>げん</sup>と

磯<sup>いそ</sup>問<sup>と</sup>  
 へむ  
 わ海<sup>うみ</sup>  
 水<sup>みづ</sup>  
 音<sup>ね</sup>  
 たある  
 声<sup>こゑ</sup>

山<sup>やま</sup>あ  
 とるも  
 川<sup>がは</sup>と  
 のが  
 は紅<sup>もみ</sup>  
 葉<sup>は</sup>石<sup>いし</sup>  
 なる  
 らる  
 て  
 する。

名<sup>な</sup>も  
 な  
 ら  
 草<sup>くさ</sup>  
 よ  
 つ  
 ぶ  
 て

思  
ひ  
人

思ひし人は今何處  
北か南かは西か  
獄屋の中よ繫を  
命終へまど聞もし侍。

悲しにいあや哀れなれ  
包れに情の深くして  
包れ亦深く思ひまに  
あはれ今何處。

死してゆかんの尋絲んか

北よ國は里まの南  
いざるや失せんの亡びんか  
北よ國は里まの南  
いざるや失せんの亡びんか

胸をか撫でいとわか愛  
少を女と暫とらくと  
涙落しつを眺免つゝ  
獄屋の方を眺免つゝ

時迄も松はあす吹く  
風のよ傳へて獄屋よ來ぬに  
人の言葉とて漏れて來ぬに  
いとの言葉とて漏れて來ぬに

多 <sup>た</sup> 人 <sup>に</sup> 事 <sup>こ</sup>	い其 <sup>そ</sup> 殺 <sup>ころ</sup> か	い思 <sup>おも</sup> 罪 <sup>つみ</sup> 罪 <sup>つみ</sup>
くはの	ゐたされ	かひ <sup>な</sup> 無 <sup>な</sup>
の自 <sup>みづか</sup> 裁 <sup>さ</sup>	よいれは	でなるき
人 <sup>ひと</sup> ら判 <sup>ま</sup>	人 <sup>ひと</sup> 赤 <sup>あか</sup> ん <sup>ん</sup> 彼 <sup>か</sup>	かし人 <sup>ひと</sup> 人 <sup>ひと</sup>
を首 <sup>くび</sup> よ	をた <sup>ま</sup> と時 <sup>とき</sup>	神 <sup>かみ</sup> よを <sup>を</sup> れ
救 <sup>すく</sup> 刎 <sup>は</sup> 當 <sup>あた</sup>	ば誠 <sup>まこと</sup> と今 <sup>いま</sup>	もる救 <sup>すく</sup> 數 <sup>かず</sup>
ひ糸 <sup>いと</sup> 里 <sup>さと</sup>	動 <sup>うご</sup> 心 <sup>こころ</sup> と <sup>と</sup> 今 <sup>いま</sup>	知 <sup>し</sup> 真 <sup>まこと</sup> と多 <sup>た</sup>
にてり	かたれ <sup>た</sup> で	らおんと
きる	せれ <sup>れ</sup> よ	ざんと
	そ	らる
	も	め

救 <sup>すく</sup> 外 <sup>ほか</sup> か	彼 <sup>か</sup>	う耳 <sup>みみ</sup> 胸 <sup>むね</sup> 聞 <sup>き</sup>	此 <sup>こ</sup> 秋 <sup>あき</sup> 過 <sup>す</sup> 君 <sup>きみ</sup>
ひのれ <sup>れ</sup> か	この	れ聳 <sup>たか</sup> む <sup>む</sup> く	屋 <sup>や</sup> のぎよ
な罪 <sup>つみ</sup> れ <sup>れ</sup> か	あれの	して騒 <sup>さわ</sup> や	よ半 <sup>なか</sup> つ <sup>つ</sup> 知 <sup>し</sup>
さん <sup>さん</sup> る <sup>る</sup> 罪 <sup>つみ</sup> の	時 <sup>とき</sup>	ゝぐ少 <sup>すく</sup>	入 <sup>い</sup> よる <sup>る</sup>
ともを <sup>を</sup> い	をい	る聞 <sup>き</sup> よ女 <sup>め</sup>	りと年 <sup>とし</sup> ら
せろ言 <sup>い</sup> の	ひば	らた <sup>た</sup> う <sup>う</sup> は	さらのむ
し人 <sup>ひと</sup> ひ <sup>ひ</sup> ば	か	むぬ <sup>ぬ</sup> ち <sup>ち</sup> さ	るさい聞 <sup>き</sup>
かを <sup>を</sup> 陳 <sup>ちん</sup> の <sup>の</sup> か	べり	ゐれ <sup>れ</sup> 連 <sup>つ</sup> と	彼 <sup>かの</sup> れ <sup>れ</sup> や <sup>や</sup> 々 <sup>々</sup>
あ	て	ゝば <sup>ば</sup> れ <sup>れ</sup> て	男 <sup>おとこ</sup> て寒 <sup>さむ</sup> か <sup>か</sup> し <sup>し</sup> な
ゝ	て	今 <sup>いま</sup>	た
ゝ	て	と	な

のれもそれときゆるされぬ。

繁れ根交へ枝さるゝ  
未だ終をねえのあどと  
年をむななく積りて

さるに此春此眞夏  
いよは落着きて

科なは此屋を出づるを  
科なは此罪のゆるさきて

今日や明日やと待に待  
妻やこが子のあをたら

いはばく勇み喜ばん  
さはをのせらと泣くべきか。

言の一意集よ少女子と  
やがて涙よくせにたり  
とよと叫びつ打伏して

一葉は涙

死せる熱血を絞りて以て世よ  
私慾私利よ、をろを活さ  
不徳無法を事とし迷ひ

雲

泥

重る人の  
たゝの  
に重務  
がきと  
身か重  
やあか  
あ重り  
きき  
はあ  
とあ  
め。

い此聲天稱  
と世い侍檀  
とのやみれ  
かう清空香  
あへくよれ  
しを字少衣  
となふ女を  
うがふ子身  
あ免なはに  
ちて里着  
侍は付けて  
。

猛蓮  
後  
男池  
兒に  
と唯  
掉ひ  
しと  
て里

の救罪  
とふ悪  
めとつ  
なる  
るのる  
の侍わ  
あとが  
あ免友  
、なを  
義務  
今絶國正平あ  
もえ利義和  
昔ぬ民のの  
も戦福聲主か  
變争叫ば義な  
らとべいとけ  
ざ世とや唱を  
るのも高へあ  
うくらあ  
へれうき  
に世  
行む公  
末な義  
知し博  
らく愛  
ぬ日つ  
あをゆ  
はば知  
を打ら  
さ過す  
にし

響 <small>ひびき</small>	雲	清	光 <small>ひかり</small>	晨 <small>あさ</small>	世	木 <small>こ</small>	食 <small>くら</small>	座 <small>ま</small>	静 <small>しず</small>
をぬ	に	け	明 <small>あ</small>	の	を	れ	ふ	る	の
とよ	空	字	た	に	ば	實 <small>み</small>	に	に	に
も空	た	影	浴 <small>あび</small>	日 <small>ひ</small>	や	海 <small>うみ</small>	肉 <small>にく</small>	荒 <small>あ</small>	日 <small>ひ</small>
のを	よ	に	び	大 <small>おほ</small>	さ	草 <small>くさ</small>	を	ら	を
聲	を	氣	て	君 <small>きみ</small>	し	味 <small>あじ</small>	打	き	ば
とと	語 <small>かた</small>	を	夜	れ	く	ひ	と	菰 <small>こも</small>	送 <small>た</small>
しあ	ら	拭 <small>ぬぐ</small>	と		送	津	い	を	ら
てま	む	ひ	月		ら	先	布	を	む
	か。		の		む		た		歎 <small>なげ</small>

清

貧

あ	あ	身	我	浮	と	い	雲	あ	空
ら	る	と	と	世	て	か	と	を	を
た	と	山	す	に	も	よ	ち	お	眺
衣 <small>きぬ</small>	海 <small>うみ</small>	深	い	て	の	せ	里	も	先
を邊 <small>へ</small>	き		ま	し	か	ん	失	ま	て
ば	よ	小 <small>こ</small>	く	も	な	や	せ	ろ	歌 <small>うた</small>
身 <small>み</small>	住 <small>すま</small>	屋 <small>や</small>	暮 <small>く</small>	あ	く	な	花	や	娘 <small>むすめ</small>
に	あ	よ	さ	里	あ	い	咲	此	な
ま	ま	置 <small>お</small>	ん	さ	あ	か	た	遊	り
と	津	き	か。	ら	れ	に	待	び	
ひ				ば	な	せ			
					る	ん			



も	我	を	訪	聞	或	木	寝	抱	鼻	ゆ
の	は	れ	問	を	は	の	る	い	に	あ
と	わ	と	よ	さ	圍	枝	よ	て	野	し
獸	が	手	好	け	爐	を	草	鼻	に	匂
も	眼	厚	き	て	の	折	を	ぎ	咲	ひ
と	に	く	人	と	火	り	褥	て	く	は
も	情	接	あ	ぬ	よ	て	と	さ	草	身
と	あ	待	ま	と	燻	花	ま	の	花	に
せ	る	し	よ	讀	へ	枕		ま	を	避
ん。	て	ら	ば	ま	て			ま	を	け
				ん。				ん。		け

汚	や	こ	よ	聽	冬	月	春	觀	あ	ひ
れ	が	、	ろ	く	と	と	は	る	る	と
香	て	ろ	づ	に	雪	風	花	よ	と	り
り	笑	ら	樂	世	を	と	草	海	人	樂
少	ぬ	ま	の	鳥	と	に	夏	山	よ	み
女	て	み	聲	鳴	も	戲	秋	打	も	風
子	喜	氣	耳	く	に	を	と	な	も	あ
の	ば	を	ま	蟲	せ	て	が	免	ら	つ
	ん	う	ま	の	ん。				さ	げ
		か	て		ん。				ん	か。
			免							

温

情

いと厚く温く  
 血はり涙れおも  
 いとく深き情よ  
 われと我身を捨  
 そが君爲と思ぬ  
 浅しといるを父  
 いや日よ深に厚  
 薄しといるを世  
 たましくわゆる情  
 わ生はまとい涙

遙比末世

君の恵に血を  
 親れ情よ血を  
 涙のやがてしよ  
 身をさしよ身を  
 いのに此身をさ  
 ぐべきて

此世をたるか過  
 過ぎて過ぎたる  
 末の浮世のいよ  
 君の知るらむい  
 遙のれ後の末世  
 いかで涙を垂れ  
 て

ひ	叫	人	む	途	埋	失	川	川	つ	山	山
ま	び	と	あ	よ	と	せ	と	と	ひ	と	と
び	し	鬼 <small>た</small>	た	燃	に	に	と	云	に	あ	云
て	聲	と	く	お	と	と	あ	ひ	此	や	ひ
風	の	れ	灰	と	骨	骨	な	香	世	し	け
と	哀	亡 <small>う</small>	と	く	と	よ	く	る	を	た	る
變 <small>かは</small>	れ	す	消 <small>き</small>	火	つ	埋	世	幾 <small>い</small>	焼 <small>や</small>	火	數 <small>かず</small>
る	よ	る	失 <small>う</small>	の	を	ま	の	何 <small>なに</small>	つ	の	々 <small>く</small>
ら	も	と	せ	爲 <small>た</small>	な	ら	人	の	く	燃 <small>も</small>	の
む。		き	て	よ	く	む。	れ		し	お	
					も					て	

石	黄	尊	哀	家	人	月	照	あ	如	い	思
の	金	た	を	と	の	の	日	と	何	の	へ
は	と	も	や	庫 <small>くら</small>	寶 <small>たから</small>	形 <small>かたち</small>	の	れ	よ	に	給
も	や	れ	悪	と	と	も	光	は	世	末	へ
里	が	と	と	と	い	失	り	の	の	世	な
て	て	思	き	お	る	す	影	な	さ	の	い
山	石	ひ	鬼	れ	よ	る	も	や	ま	あ	宅
も	と	に	の	づ	り	ら	な	世	變	る	深 <small>ふか</small>
せ	な	し	住	か	と	む。	く	の	る	べ	く
む。	里		み	ら				上	べ	き	
								は	受	ず	

忍  
び  
音

爲	あ	數	年	生	さ	わ	つ	ひ
せ	と	を	を	を	て	が	ら	と
し	を	上	經	て	も	身	く	と
こ	言	げ	ぬ	出	涙	の	思	徒
と	葉	な	る	で	れ	上	ひ	然
を	の	ば	る	、	落	を	先	な
と	盡	唯	經	幾	侍	尋	ぐ	る
取	ぬ	と	よ	そ	る	ぬ	ら	ま
出	べ	ち	々	度	る	れ	し	、
で	し。	て	る	、	な。	ば	よ	て
、								

の	つ	勤	徐	末	悲	如	狂	思	變	苦	涙
が	と	み	ろ	の	し	何	か	ひ	ひ	り	し
を	め	給	身	世	限	に	て	給	ふ	た	血
て	て	へ	の	の	り	此	荒	る	と	聲	と
神	早	世	毛	さ	や	世	れ	な	り	の	の
と	く	れ	の	ま	あ	を	て	い	る	凝	含
遊	此	人	よ	い	わ	乱	吹	る	暴	と	ま
ば	世	よ	立	た	れ	ず	た	ば	風	結	れ
あ	を		つ	と	や	ら	騒	か	は	び	て
む。	ば		な	ま	な	ん。	ぎ	り			

人	な	失	速	道	早	道	此	世	あ	道
の	ま	せ	く	を	く	を	世	と	れ	を
手	て	じ	て	知	亡	知	の	ま	れ	知
元	ひ	亡	す	ら	す	ら	人	の	死	ら
よ	人	ら	る	ず	る	ず	に	俱	ぬ	ず
死	に	の	よ	を	よ	ば	盡	み	る	ば
せ	嫌	優	如	世	如	知	を	長	に	知
ん	え	る	う	の	か	ら	べ	ら	如	ら
よ	れ	べ	ざ	人	ざ	ざ	き	へ	か	ず
り	つ	き	ら	よ	ら	ら	て	え	ざ	ん
		免			ら	ら	つ		ら	ば
					む	ば		つ	ら	む

苦き言の葉

人	世	と	と	と	年	わ	悲	哀	た	お	見
と	と	て	も	も	と	が	玄	れ	い	れ	や
此	よ	此	此	此	む	身	と	と	に	も	を
世	の	世	世	世	あ	え	い	い	悲	涙	ば
に	俱	世	世	世	玄	は	ふ	う	歎	の	哀
盡	に	よ	よ	よ	く	杯	も	も	の	種	を
す	生	生	生	生	老	よ	情	愚	外	此	情
べ	ひ	を	を	を	ゆ	拙	な	や	と	み	あ
き	立	出	出	出	る	く	や	な	な	が	や
	ち	で	で	で	の	て			し		
	て				み						

冷

情

人知知  
とりて  
此つ、盡  
世の人力  
のみに  
米盡力  
蟲どぞる

人万と  
とつれ  
生れ  
何世  
に住  
みて  
眺めろく  
を天あ  
地ちと  
山まを  
河か  
のる  
つて。

人情  
薄すむ  
は哀  
を  
見  
堪る  
毎に  
かぬ  
情な  
薄う  
すむ  
をひ  
見る  
毎に  
かぬ  
情な

道速く  
を盡  
力す  
あば  
世の  
人よ  
は  
速く  
盡力  
すあ  
ば  
世の  
人よ  
は  
道速く  
を盡  
力す  
あば  
世の  
人よ  
は

知知ら  
らば  
如か  
かじ  
失せ  
ぬべ  
し  
人  
の  
人  
た  
る  
其  
所  
以  
て  
た  
ど。

道  
を  
知  
れ  
る  
も  
尽  
さ  
る  
あ  
ら  
ど

そ  
い  
ろ  
其  
人  
憎  
む  
免  
り。

い  
と  
も  
い  
ま  
と  
ま  
は  
ま  
や  
の  
人  
の

情  
同  
じ  
浮  
世  
の  
に  
住  
ま  
て  
ぬ  
つ

人  
と  
如  
何  
か  
ん  
の  
情  
に  
と  
た  
ゞ

つ  
ま  
い  
や  
ろ  
い  
冷  
み  
か  
る  
の  
逆  
立  
ち  
て

ね  
ろ  
お  
涙  
を  
落  
す  
な  
り。

い  
か  
よ  
せ  
ん  
や  
な  
如  
何  
が  
せ  
ん

と  
か  
も  
浮  
世  
と  
い  
と  
冷  
き

情  
の  
外  
と  
な  
る  
か  
な  
経  
る  
か。

斯  
か  
る  
ま  
よ  
て  
世  
と  
経  
る  
か。

人  
と  
老  
い  
ゆ  
た  
年  
嵩  
み  
し  
か  
く

あ  
は  
れ  
や  
世  
を  
バ  
捨  
て  
ん  
か  
く

月  
と  
雲

清  
き  
み  
空  
を  
汚  
ま  
あ  
り  
り。

思	思	或	胸	浮	紅	ひ	浮	流	と
ひ	る	ひ	よ	る	染	ま	世	れ	字
よ	そ	よ	凝	の	み	あ	の	ゆ	く
り	悔	あ	り	悲	し	く	人	く	と
く	ま	ま	た	し	の	廻	の	野	字
る	き	る	る	た	歎	り	血	の	と
涙	可	血	血	無	は	來	沙	涙	音
な	愛	の	れ	情	な	る	水	川	高
り	し	平	涙	の	る	な	る	る	く
	た	の							

涙

川

さ	迷	わ	心	雲	わ	雲	見	る
れ	ひ	を	こ	は	れ	こ	ん	悲
と	の	と	や	胸	と	隠	と	悲
そ	雲	叫	が	よ	迷	し	思	し
こ	を	び	て	と	ひ	て	ひ	や
唯	晴	ぬ	乱	横	ぬ	影	し	な
徒	さ	い	る	と	い	も	月	る
な	ん	と	な	と	と	な	を	、
り	と	高	り	深	た	！	君	哀
ま	る	く					を	を



今そ妻寄親家	今遊親都家
はもと添とと	とびをのを、
結幾いふあ	我くぬ空忍
ば年せり手て	身ら里をびあ
んを玄術まど	のせ捨てはつ
緒を経も更も	零しては立
もに去に子無	落報く子を
あけりあと	て。いに捨て
らるじしあ	りにつ
じ。よりと	

橋  
比  
下

さるわのき男は糧を乞へるがあれけり。  
余里のおと、我も思ひは、人も言ひさる  
るるが、なさけなきて浮世なるのな、幸  
るか里ける身之皆斯くありなむと、聞  
きは覺えは、はひに彼が胸は思ひを推は  
の里て、思ぬがま、に斯くとしるまぬ。

逆さ巻く浪れ音す  
流る血、水の結いや淋しく  
血石、血、砂の日の結いや淋しく  
浮ぶ石、血、砂の日の結いや淋しく  
殖えつて。

今 <sup>こ</sup> 夜 <sup>よ</sup> 身 <sup>み</sup> 喰 <sup>く</sup> ら <sup>ら</sup> 今 <sup>いま</sup> い <sup>い</sup> さ	世 <sup>よ</sup> ま <sup>ま</sup> 返 <sup>か</sup> か <sup>か</sup> 歸 <sup>い</sup>
宵 <sup>よ</sup> 々 <sup>々</sup> は <sup>は</sup> ぬ <sup>ぬ</sup> の <sup>の</sup> と	に <sup>に</sup> し <sup>し</sup> ら <sup>ら</sup> へ <sup>へ</sup> り <sup>り</sup> で
の <sup>の</sup> れ <sup>れ</sup> と <sup>と</sup> 米 <sup>こめ</sup> ゆ <sup>ゆ</sup> れ	捨 <sup>す</sup> て <sup>て</sup> ば <sup>ば</sup> ら <sup>ら</sup> て <sup>て</sup> や
宿 <sup>やど</sup> 宿 <sup>やど</sup> 繼 <sup>つ</sup> な <sup>な</sup> く <sup>く</sup> 思 <sup>し</sup>	ら <sup>ら</sup> 便 <sup>た</sup> 親 <sup>か</sup> ば <sup>ば</sup> 身 <sup>み</sup> 歸 <sup>かへ</sup>
も <sup>も</sup> 里 <sup>さと</sup> 縷 <sup>いと</sup> く <sup>く</sup> す <sup>す</sup> る <sup>る</sup>	れ <sup>れ</sup> ら <sup>ら</sup> れ <sup>れ</sup> 人 <sup>ひと</sup> を <sup>を</sup> ら
橋 <sup>はし</sup> 之 <sup>の</sup> 粟 <sup>あは</sup> ゑ <sup>ゑ</sup> ば	え <sup>え</sup> ん <sup>ん</sup> 歎 <sup>なげ</sup> ふ <sup>ふ</sup> む <sup>む</sup>
の <sup>の</sup> 橋 <sup>はし</sup> み <sup>み</sup> も <sup>も</sup> い <sup>い</sup> お	己 <sup>おの</sup> よ <sup>よ</sup> く <sup>く</sup> わ <sup>わ</sup> 定 <sup>さだ</sup> ぬ <sup>ぬ</sup>
う <sup>う</sup> の <sup>の</sup> だ <sup>だ</sup> な <sup>な</sup> か <sup>か</sup> の <sup>の</sup>	が <sup>が</sup> す <sup>す</sup> ら <sup>ら</sup> ら <sup>ら</sup> 免 <sup>ま</sup> る <sup>る</sup>
ち <sup>ち</sup> 。え <sup>え</sup> れ <sup>れ</sup> く <sup>く</sup> な <sup>な</sup> が <sup>が</sup>	身 <sup>み</sup> が <sup>が</sup> む <sup>む</sup> え <sup>え</sup> ん <sup>ん</sup> さ <sup>さ</sup>
た <sup>た</sup> 菰 <sup>こも</sup> ら <sup>ら</sup> 身 <sup>み</sup>	の <sup>の</sup> 。な <sup>な</sup> ま <sup>ま</sup> る <sup>る</sup> と <sup>と</sup>
め <sup>め</sup> よ	た <sup>た</sup> む <sup>む</sup> に <sup>に</sup>

雲 <sup>う</sup> 天 <sup>てん</sup> 白 <sup>はく</sup> 家 <sup>か</sup> 炊 <sup>か</sup> 故 <sup>ふる</sup>	い <sup>い</sup> 姉 <sup>あね</sup> こ <sup>こ</sup> 友 <sup>とも</sup> 枝 <sup>えだ</sup> 親 <sup>かみ</sup>
と <sup>と</sup> を <sup>を</sup> き <sup>き</sup> の <sup>の</sup> 郷 <sup>き</sup>	ま <sup>ま</sup> も <sup>も</sup> れ <sup>れ</sup> の <sup>の</sup> よ <sup>よ</sup> 類 <sup>るい</sup>
も <sup>も</sup> も <sup>も</sup> 黒 <sup>くろ</sup> 戸 <sup>こ</sup> 煙 <sup>けむり</sup> 遙 <sup>はる</sup>	の <sup>の</sup> 妹 <sup>いもうと</sup> を <sup>を</sup> 人 <sup>ひと</sup> 柱 <sup>はしら</sup> の <sup>の</sup>
紛 <sup>まが</sup> つ <sup>つ</sup> た <sup>た</sup> 毎 <sup>こ</sup> も <sup>も</sup> の <sup>の</sup>	便 <sup>た</sup> も <sup>も</sup> 最 <sup>さい</sup> よ <sup>よ</sup> と <sup>と</sup> も
ふ <sup>ふ</sup> か <sup>か</sup> が <sup>が</sup> に <sup>に</sup> ろ <sup>ろ</sup> 見 <sup>み</sup>	ら <sup>ら</sup> あ <sup>あ</sup> 後 <sup>ご</sup> も <sup>も</sup> 頼 <sup>たの</sup> の <sup>の</sup>
ば <sup>ば</sup> ん <sup>ん</sup> 打 <sup>うち</sup> 昇 <sup>のぼ</sup> く <sup>く</sup> と <sup>と</sup>	む <sup>む</sup> 里 <sup>さと</sup> と <sup>と</sup> 見 <sup>み</sup> み <sup>み</sup> に <sup>に</sup>
か <sup>か</sup> か <sup>か</sup> 交 <sup>まじ</sup> る <sup>る</sup> と <sup>と</sup>	術 <sup>すべ</sup> え <sup>え</sup> 諫 <sup>いさ</sup> 限 <sup>かぎ</sup> た <sup>た</sup> 見 <sup>み</sup>
里 <sup>さと</sup> ば <sup>ば</sup> 里 <sup>さと</sup> な <sup>な</sup>	ず <sup>ず</sup> の <sup>の</sup> め <sup>め</sup> ら <sup>ら</sup> る <sup>る</sup> 捨 <sup>す</sup>
な <sup>な</sup> か <sup>か</sup> 里 <sup>さと</sup>	な <sup>な</sup> と <sup>と</sup> に <sup>に</sup> れ <sup>れ</sup> て <sup>て</sup>
り <sup>り</sup> 里 <sup>さと</sup>	き <sup>き</sup> し <sup>し</sup> ら <sup>ら</sup>
に <sup>に</sup>	を <sup>を</sup>

山

彦

山<sup>やま</sup> 戀<sup>こひ</sup>と 谷<sup>たに</sup>を  
 邊<sup>へ</sup> 去<sup>こ</sup>も 隔<sup>へだ</sup>て  
 は ぎよ 隔<sup>へだ</sup>て  
 る 夫<sup>つと</sup>よ 呼<sup>よ</sup>ぶ  
 か と ば、 呼<sup>よ</sup>ぶ  
 よ 答<sup>こた</sup>へ 呼<sup>よ</sup>ぶ  
 答<sup>こた</sup>ふ へ 聲<sup>こゑ</sup>を  
 れ ず 声<sup>こゑ</sup>を  
 ば に。 す なる

風<sup>かぜ</sup> 飢<sup>う</sup>妻<sup>つま</sup> 親<sup>おや</sup>む な  
 と と れ の く さ  
 い ま 歎<sup>なげ</sup> 悲<sup>かな</sup>い け  
 よ ま の 歎<sup>なげ</sup>と ち ち  
 く く 報<sup>かたじけ</sup>と 日<sup>ひ</sup>い  
 肌<sup>はだ</sup>遍<sup>ま</sup>る 子<sup>こ</sup>々<sup>々</sup>か  
 よ る かな の に な  
 し あり かな な 廻<sup>まわ</sup>る 悲<sup>かな</sup>さ  
 む。 なげ 愛<sup>あい</sup>る ちや ちや

う 身<sup>み</sup>人<sup>ひと</sup>の 夏<sup>なつ</sup>春<sup>はる</sup>  
 ら を と ら は と  
 や ば 熱<sup>あつ</sup>ざ 呼<sup>よ</sup>べ  
 む 温<sup>ぬ</sup>り べ て  
 れ 先<sup>ま</sup>き ち ど ち  
 み ち 炬<sup>た</sup>る も も  
 よ わ 燧<sup>たき</sup>よ 答<sup>こた</sup>い  
 唧<sup>ささ</sup>を 火<sup>ひ</sup>の ち 遠<sup>とほ</sup>く  
 つ と に ち 哀<sup>あは</sup>れ  
 れ た ち 哀<sup>あは</sup>れ  
 み。 ち 哀<sup>あは</sup>れ

し 食<sup>た</sup>寒<sup>ふ</sup>嵐<sup>あらし</sup>此<sup>こ</sup> ち  
 の は さ と ま、  
 ぐ 乞<sup>こ</sup>と 日<sup>ひ</sup>た 行<sup>ゆ</sup>  
 能<sup>よ</sup>る し 々<sup>々</sup>末<sup>すえ</sup>を  
 と ち げ に の ち  
 ぬ も く 加<sup>か</sup>は 何<sup>なに</sup>  
 已<sup>い</sup>其<sup>その</sup>増<sup>ま</sup>は 何<sup>なに</sup>  
 が 日<sup>ひ</sup>ば ち 何<sup>なに</sup>  
 身<sup>み</sup>だ ち 何<sup>なに</sup>  
 れ よ り 何<sup>なに</sup>

戀とも  
まきに  
さ答  
夫ふる  
の音  
聲す  
はあ  
る。

何處に  
いっ  
こ  
る  
行  
き  
さ  
ら  
む

戀し  
し  
き  
夫  
と  
い  
づ  
お  
な  
る  
に

仙 境

流るゝ水は滾々とえて青く、巖の苔とい  
や蒸えて、しよゝゝる雫と眞珠も似よ。  
創成幾千年に谿谷、塵埃宛然拭ひ去が如  
く、白雲峯を走つて、風聲穩かに松露は  
糸よ霑ぬ、瀧川瀬の浪遙か深奥の彼方お

音して、よまゝく散り來る桃李の一片、  
或と盧天よ翻々とし、或と岸頭に悄影を  
とゞめ、葦の幹葉亦よまゝく折れて無常  
を現え、幽邊つ糸よ流轉せずと雖も、  
四季交々來りて此影をささしむ。さはれ  
人境今晚秋、うもおれ此境晩春の景か。

郷異をば時違ぬ  
夢路越ゆく一万里  
四方之霞ふとざ、をて  
遠眺望よ見ぬわかず。

のれと晩秋此郷里と  
春のそそぐと知らせけり

花散りと盛るる見えぬ世のゆゑか。

雲の棧橋の道  
自らのなる家の門と  
と工よるか  
幾歳を  
経るにけむ。

古びたりる柴垣と  
誰が結ひるしものならむ  
清たうひそ免し  
香かほり  
えた人のならんばしき

聲をる家の松蔭の

清た彼方の宇ちみ  
道た歩免るその人  
つねの免れにはあらぬあ。

たま遊ぶ岸の邊の  
人をほら見るをた  
やさても人に見るを  
やさましくるえうつくし。

花を頭つむりにうちかざ  
藤の葉は衣ころもひら  
折を吹かく風かぜになび  
飛ぶやみ空にいや高く。

桃の一枝を手に  
析きて  
流る水に  
てらく  
其花をふ  
て  
微笑あがら  
字さぬとた。

汚人す  
濁りどが、  
は此世眺  
、のい  
にいやふ  
見るをか  
を得じ。

うさふそ  
はさや  
りくす  
い  
か  
ば  
かり

わらのぬ顔  
も色香は  
あ  
ら  
は  
れ  
て

空地  
よ  
う  
た  
へ  
ば  
地  
と  
あ  
さ  
る

流る  
と  
き  
よ  
ま  
え  
い  
や  
高  
し

ものがたを

い	お	は	包	さ	お	包	お	さ
で	れ	た	か	ら	も	れ	も	ら
や	が	な	き	ば	と	と	ひ	ば
語	お	た	男	聞	つ	つ	の	聞
ら	も	な	の	く	は	は	は	く
む	ひ	が	兒	べ	ま	ま	ま	べ
む	れ	ら	と	し	み	を	を	し
世	こ	こ	言	あ	か	お	あ	あ
れ	ま	ま	る	と	ま	と	と	あ
人	や	か	に	く	み	み	み	く
に	を	か	り	君	て	て	て	て
に	ば	に	り	れ	て	て	て	て

お	こ	を	し	お	こ	を	し	お
の	ま	の	づ	の	ま	の	づ	の
が	に	こ	あ	が	に	こ	あ	が
ち	包	は	あ	ち	包	は	あ	ち
か	が	や	ら	か	が	や	ら	か
ら	身	を	う	ら	身	を	う	ら
を	空	ら	ほ	を	空	ら	ほ	を
か	想	言	た	か	想	言	た	か
へ	だ	ひ	を	へ	だ	ひ	を	へ
り	糸	お	て	り	糸	お	て	り
み	ま	け	か	み	ま	け	か	み
よ	じ	り	ま	よ	じ	り	ま	よ

神迷聞 斯 熱 侍 所  
 のの々 くのき い 々 々  
 を淵よ しまを あ 々 々  
 しに世の 其こ ろ 々 々  
 るに人い わざめ とい 々 々  
 にまむい なら 勵みや 々 々  
 ぶまじさ ざら みる 厚た 々 々  
 へよ ば ば 々 々

一トたは高くいゑにけり  
 かのが力ちからを顧かへり慮みす  
 たいよおもしひのゆくまゝ  
 なさば其身は亡ぶらむ  
 またく高言へにけり  
 侍、玄めかえなおもゑかし  
 かのがちのらと其好むけれ  
 舌語るや空よ月しろく  
 眞夜まよ中の



わ  
が  
國

風は肌をつんざきて  
聞くもあつれや蟲の聲  
語里し人との影もあ  
かほくはれ人もあ  
夢かうはれ人もあ  
かまうはれ人もあ

うれまいかあや  
君よよれまが國や  
あ君よれまが國や  
われら君よれまが國や

汚穢ある身も幸れ無た  
身をよもともく光らせて  
嗚呼君よ君いかに  
われら君よれまが國や

なさを保ちやあ君の  
たえの心れ底よあそ  
ながくの心れ底よあそ  
字れしくこの心れ底よあそ

世とあさけあはいは  
こゝろよさけあはいは  
君のこゝろよさけあはいは

い  
を  
清  
ら  
か  
よ  
潔  
よ  
く

む  
の  
し  
よ  
り  
ま  
て  
と  
る  
か  
あ  
る

神  
の  
御  
國  
と  
仰  
が  
ま  
て

君  
の  
こ  
れ  
よ  
り  
い  
つ  
ま  
で  
か

け  
だ  
る  
た  
名  
を  
ば  
残  
ま  
ら  
む

い  
の  
に  
い  
つ  
ま  
で  
い  
は  
ま  
で  
あ

君  
の  
こ  
れ  
を  
慈  
し  
み  
は  
、

年  
を  
重  
ね  
は  
積  
る  
ら  
先。

思  
へ  
お  
も  
へ  
ば  
我  
と  
よ  
い

君  
を  
お  
も  
へ  
ば  
我  
と  
よ  
い

あ  
の  
れ  
は  
戀  
し  
く  
こ  
の  
懷  
し  
く。

身  
を  
や  
捧  
げ  
む  
君  
よ  
こ  
そ

命  
さ  
、  
げ  
ん  
唯  
君  
よ  
こ  
の

思  
へ  
ば  
い  
と  
、  
戀  
し  
さ  
の

ま  
さ  
に  
は  
も  
り  
て  
嬉  
ま  
く  
て。

い  
と  
ま  
い  
か  
な  
や  
君  
を  
あ  
そ

思  
ひ  
は  
見  
て  
は  
ま  
る  
と  
き  
と

教  
の  
惠  
日  
の  
恩  
惠

月　深　の  
た　め  
俱とも　惠なまじ  
よ　に　ぐ  
歎なげ　わ　み  
く　を　や  
の　は　山  
と　も　唯　川  
の

は　あ　さ　き　此　身　い　か　よ　せ　ん  
あ　、　身　と　つ　糸　に　あ　り　な　が　ら  
か　、　手　厚　た　を　知　ら　ぬ　か　な。  
む　く　ゆ　る　ま　べ　を　ら　ぬ　か　な。

人　と　生　を　を　其　か　ひ　に  
何　が　あ　君　の　り　れ　為　さ　ん　と　は  
な　る　べ　き　と　を　為　さ　ん　と　は  
思　ひ　ど　あ　れ　の　ひ　ふ　な　た。

日　が　な　思　へ　る　お　と　、　も　を  
神　の　御　法　に　お　し　あ　は　て　、  
見　や　れ　ば　い　よ　歎　た　て　、  
足　ら　ぬ　が　ち　な　る　悔　し　さ　よ。

さ　ら　を　わ　が　國　を　ば　答　せ　て  
斯　る　こ　と　を　先　ぐ　と　め　る。  
幸　つ　ね　に　あ　た　ら　ぬ　め　る。

た　の　し　き　あ　や　斯　も　ま　よ  
慈　愛　の　有　る　な　る　血　と　涙  
養　を　の　疑　る　な　る　風　情　あ　る　ま　よ  
か　く　ま　よ　あ　さ　り　あ　る　國　よ、

生なまひひまま我わが身みののううれれままささよよ  
住すま免めんるるかかののれれななつつるるししやや  
君きみよよたたののももししわわれれ戀こひひひしし  
思おもへへばば吾われののししたたととままたた。

外まが國くに人ひとととかかくくももかかくく  
慈あは惠めぐののああ、、ろろししららじじややああ  
厚あつたたああささけけののああももりりけけるる  
我わが國くに味あじをを知しららざざららむむ。

人ひとよよおおももへへああぬぬかかくくとと  
我わががが國くにのの民たみいいへへ皆みなととももににふふ  
いいづづおおのの郷さとよよ神かみとといいふふ

御おん名なののははたたけけるる國くにありりやや。

此こゝ世よのの外ほかとといいざざししららとと  
近ちかたた御おん國くにののいいぬぬななめめるるかか  
神かみののあありりぬぬかかははるるかか  
國くにととあありりぬぬかかははるるかか

能あたくくももああははへへかかままししめめてて  
我わががが日ひ本もとよよをを清きよめめつつるる、  
人ひとととああいいかかななるる味あじををままるる。

厚あつききななささのの幾いく何なにあありり  
深ふかききななささのの幾いく何なにあありり

そ 峯 谿 かの かの かの  
 の の の 柏 流 柏 流 柏 流  
 ぎ 柏 流 柏 流 柏 流 柏 流  
 は に せ い 情 を 身 に 聞 け べ た や  
 あ 情 を 身 に 聞 け べ た や  
 る を 身 に 聞 け べ た や  
 と ば 寄 せ つ た や  
 う せ つ た や  
 ぶ ら た れ

援 や 聲 い 空 援 甲  
 の が を と を 字 斐  
 音 て を も く ち 々  
 も う い 優 揃 々  
 と へ ろ し 翼 止 へ し  
 や へ ろ し 翼 止 へ し  
 涙 る 張 い や 清 き  
 な 小 唄 げ つ  
 り。

空 を かり 舞 ぬ 鳥 も  
 翼 止 む ら ん

機 織 娘

少 姿 綾 紅 幸 國 眼 よ  
 女 い に き 福 ち れ の く  
 は み 織 紫 と 輝 雲 も  
 脊 ト 里 お 恩 め た を 打  
 お く へ き 惠 み 身 ぬ 視  
 玉 う る 交 手 の ぐ よ  
 襪 だ する 太 紐 て 手 光 ひ 我 國  
 と し を と り て。

こ も へ へ け る ぞ や。

定めあき世に涙をば  
そ、げる歌のと去しを。

しはにさひてあけるが  
何が心さにははるむ

あつれ優なさはよ  
かかれと優聲うちとめ

涙歌のぬえをば口説ける。  
泣く口惜やと言ひはるも  
いふ思ひの音を去死て  
なにかで忘るてはべらんや

小掬まき歌うたには音ねには氣きをを晴はらえ  
そも此機を誰が為よ  
織りてあるべき織るべき

あ、情なやなさ々な  
君が為よと織る機を  
君と契りよとそその後  
妾も用ひ君よまよ

さ、げんものど織る機を  
あ、げんものど織る機を  
君之病の床に臥え  
今にも死出れ旅三塗

笛の音

あ<sup>〇</sup>深<sup>ふか</sup>さ<sup>〇</sup>き  
の<sup>〇</sup>か  
葉<sup>は</sup>え  
露<sup>つゆ</sup>瀨<sup>せ</sup>  
とを  
消<sup>け</sup>え  
る<sup>〇</sup>あ  
く<sup>〇</sup>も  
と<sup>〇</sup>...

夕<sup>ゆふ</sup>の<sup>〇</sup>さ<sup>〇</sup>霧<sup>きり</sup>ち<sup>〇</sup>り<sup>〇</sup>  
う<sup>〇</sup>せ<sup>〇</sup>て<sup>〇</sup>影<sup>かげ</sup>あ<sup>〇</sup>た<sup>〇</sup>青<sup>あお</sup>空<sup>そら</sup>に<sup>〇</sup>  
い<sup>〇</sup>く<sup>〇</sup>ほ<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>も<sup>〇</sup>あ<sup>〇</sup>く<sup>〇</sup>晃<sup>きら</sup>々<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>  
光<sup>ひかり</sup>り<sup>〇</sup>か<sup>〇</sup>い<sup>〇</sup>や<sup>〇</sup>く<sup>〇</sup>星<sup>ほし</sup>月<sup>つき</sup>夜<sup>よ</sup>と<sup>〇</sup>  
芭<sup>ば</sup>蕉<sup>せう</sup>を<sup>〇</sup>立<sup>た</sup>出<sup>で</sup>た<sup>〇</sup>吹<sup>ふ</sup>く<sup>〇</sup>風<sup>かぜ</sup>に<sup>〇</sup>  
宿<sup>しゆく</sup>を<sup>〇</sup>立<sup>た</sup>出<sup>で</sup>た<sup>〇</sup>獨<sup>ひとり</sup>り<sup>〇</sup>  
庭<sup>にわ</sup>れ<sup>〇</sup>籬<sup>かき</sup>に<sup>〇</sup>寄<sup>よ</sup>添<sup>ぞ</sup>へ<sup>〇</sup>ば<sup>〇</sup>  
さ<sup>〇</sup>て<sup>〇</sup>も<sup>〇</sup>涙<sup>なみだ</sup>か<sup>〇</sup>え<sup>〇</sup>さ<sup>〇</sup>露<sup>つゆ</sup>か<sup>〇</sup>

乙

な<sup>〇</sup>つ<sup>〇</sup>か<sup>〇</sup>え<sup>〇</sup>い<sup>〇</sup>や<sup>〇</sup>な<sup>〇</sup>は<sup>〇</sup>ら<sup>〇</sup>く<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>  
お<sup>〇</sup>も<sup>〇</sup>ろ<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>ば<sup>〇</sup>胸<sup>むね</sup>に<sup>〇</sup>解<sup>と</sup>け<sup>〇</sup>ゆ<sup>〇</sup>き<sup>〇</sup>て<sup>〇</sup>  
あ<sup>〇</sup>ろ<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>づ<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>ふ<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>里<sup>さと</sup>に<sup>〇</sup>  
夢<sup>ゆめ</sup>を<sup>〇</sup>む<sup>〇</sup>ま<sup>〇</sup>び<sup>〇</sup>ぬ<sup>〇</sup>あ<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>ま<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>も<sup>〇</sup>

戀<sup>こひ</sup>し<sup>〇</sup>き<sup>〇</sup>友<sup>とも</sup>よ<sup>〇</sup>君<sup>きみ</sup>よ<sup>〇</sup>見<sup>み</sup>ゆ<sup>〇</sup>  
ぬ<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>く<sup>〇</sup>む<sup>〇</sup>す<sup>〇</sup>び<sup>〇</sup>え<sup>〇</sup>笛<sup>ふえ</sup>の<sup>〇</sup>友<sup>とも</sup>  
春<sup>はる</sup>と<sup>〇</sup>櫻<sup>さくら</sup>に<sup>〇</sup>あ<sup>〇</sup>こ<sup>〇</sup>が<sup>〇</sup>れ<sup>〇</sup>て<sup>〇</sup>  
秋<sup>あき</sup>は<sup>〇</sup>枯<sup>か</sup>野<sup>の</sup>に<sup>〇</sup>月<sup>つき</sup>に<sup>〇</sup>れ<sup>〇</sup>澄<sup>す</sup>て<sup>〇</sup>

こ<sup>〇</sup>ろ<sup>〇</sup>さ<sup>〇</sup>や<sup>〇</sup>々<sup>〇</sup>く<sup>〇</sup>よ<sup>〇</sup>た<sup>〇</sup>ま<sup>〇</sup>よ<sup>〇</sup>  
吹<sup>ふ</sup>た<sup>〇</sup>て<sup>〇</sup>す<sup>〇</sup>さ<sup>〇</sup>み<sup>〇</sup>え<sup>〇</sup>俤<sup>おもかげ</sup>や<sup>〇</sup>  
あ<sup>〇</sup>く<sup>〇</sup>消<sup>け</sup>え<sup>〇</sup>ぬ<sup>〇</sup>ま<sup>〇</sup>見<sup>み</sup>ゆ<sup>〇</sup>は<sup>〇</sup>

あはれは聞えつ笛の音の。

悲玄いかなやあらひとり

戀玄き笛の友捨てゝの

都とるかよ來えわきの

今い櫻も秋の野も

哀れなるあなほら獨り

さむい遊ばん友もなき

遊ぶ友數しげれなき

ひすび玄笛の友なき

はらゝくまなたことれ限るあき

あなや雲もて呼ばんかな

さはれ呼べども其甲斐の

なき不恨め玄限りやな

我が友垣とのるだもぬ

雲と彼方よ通ひは千里走せども

花の束

あゝおれを捨て、歸るの哀れさよ。

かなとて捨侍べき捨てべきや



深き情を語らひゆ  
折て東絲花ぬさを

さ  
いとても花と此野に咲きみちほ。

いかにも咲くともみつるとも

君とも後とも手には折り

花をいかかでも捨ればらん

捨てなば神のか捨ればむ。

お  
そろ玄や神の答にあり侍るか。

神れとあ先でほるべきや

情ほるあ好ませて

あまふ神あな君よ

いあでる答なかるべ愛。

いかばかり情を神と好まれつ。

たゝまきあどよ情ある

あどいよろづの神々と

みなくともには好ませ

侍ねまたのしと給ひける。

さ  
とあれと花を捨侍るも答あらじ。

いなよいあくどが先あり

神のほ答と目前

君の哀を云ひたりし

花を捨侍るを君よ君

然とあれわをすてあむつれあくも

はれあきこととと。神の忌と  
よからぬおとと。嫌せせて  
かたまふものをは恐れずも  
君はすてゆるゝるなあはれ

あ、されど此花のみはゆるせりし

未だこれとわ里知らぬか  
君ととととの情ほり  
神の恵よ生え立ちて  
咲たてあ里々る花なるを

いざさらば止まなむとても捨るをば

やみて給ぬかうれえやな  
人といぬなれそをあそ

花といへどもいくばくの  
なさらけ無からぬもれかあ、

寄語一片

黄金

鳴呼 汝れ黄が金は汝れ悪魔  
多人血ひれ男子由を束縛の  
多ち血ひれ男子由を束縛の  
うち血ひれ男子由を束縛の  
無情なるかあ悩まさず

悪魔よ悪魔を咄し  
人の悲歎を咄し  
いあに苦ま悩まさず  
無情なるかあ悩まさず  
うち血ひれ男子由を束縛の  
多ち血ひれ男子由を束縛の  
多人血ひれ男子由を束縛の  
鳴呼 汝れ黄が金は汝れ悪魔

徳義を破る大利劍  
人となが故よ  
犯罪不徳極もな  
死滅紛争絶ゆるな  
いよましいか  
汝と此世を暗  
怪しれたる  
清き世界に  
光る文  
人をして獄  
思ひ見よか  
な世れ黄金の上の

汝の肌膚をば離隔せト  
咄々悪魔是惡魔  
汝が私慾をば離隔せト  
汝が身に團逼りて  
天と地に破裂し  
世悲陰險地の聲に  
汝の形よ邪慳れ人ら  
影の形よ添ふおとく  
汝の富豪道知らぬ  
あるごと豪道知らぬ  
影の形よ添ふおとく

人と道とを迷として  
いゝよ此世を汚すか  
鳴呼々々悪魔咄悪魔  
速く反省自覺せよ

濁り世

濁りのが住みつる世の中  
いかにあせん  
いかにあせん  
あつる世の中

世に逆へば身はに  
世に逆へば身はに  
世に逆へば身はに  
世に逆へば身はに

よければあつる人か  
亡びば世をばいかせん

善き人も

いと善き人と言ふ  
正しき人もあつるや  
悪しき風にとしむるぞ

あつる人れ  
これに言へばとあつる人れ  
こゝろゆるせぬ浮世な

雨は夕宵

う附引と兄涙 門<sup>か</sup>呼杖<sup>つ</sup>曲<sup>ま</sup>玄<sup>ま</sup>壯<sup>ま</sup>  
 添止げよぐ のびつを<sup>と</sup>健<sup>め</sup>  
 て辱免も何<sup>み</sup>み 小てきるがで  
 や來つ<sup>ま</sup>處<sup>つ</sup> 路給な腰<sup>れ</sup>歸<sup>か</sup>  
 あに、ら辱、 見し<sup>ら</sup>よを聲<sup>れ</sup>  
 としもす行<sup>妹</sup> 見ゆ面立<sup>ぼ</sup>張<sup>婆</sup>  
 れ顔<sup>稍</sup>に<sup>く</sup>れ 見容<sup>少</sup>時<sup>袖</sup>か<sup>し</sup>  
 見ゆの<sup>と</sup>るなり。

豆う葡<sup>ぶ</sup>名家見 故<sup>こ</sup>文<sup>文</sup>獨<sup>ひ</sup>字<sup>字</sup>萎<sup>し</sup>日<sup>ひ</sup>  
 のら萄<sup>たう</sup>をゆ 郷<sup>き</sup>ひ<sup>ひ</sup>ら<sup>ら</sup>み<sup>み</sup>頃<sup>ころ</sup>  
 小の<sup>と</sup>出<sup>る</sup> 遙<sup>は</sup>も<sup>も</sup>机<sup>つく</sup>み<sup>み</sup>が<sup>が</sup>の  
 畑<sup>畑</sup>與<sup>と</sup>園<sup>を</sup>を<sup>で</sup>が<sup>が</sup>  
 も市<sup>市</sup>や<sup>し</sup>ま<sup>ま</sup>  
 見<sup>見</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>み<sup>み</sup>る<sup>る</sup>  
 ゆ作<sup>作</sup>る<sup>る</sup>玄<sup>玄</sup>其<sup>其</sup>に<sup>に</sup>  
 る<sup>る</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>梯<sup>梯</sup>と<sup>と</sup>近<sup>近</sup>  
 あ<sup>あ</sup>に<sup>に</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>木<sup>木</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ば  
 豆<sup>豆</sup>

故<sup>こ</sup>文<sup>文</sup>獨<sup>ひ</sup>字<sup>字</sup>萎<sup>し</sup>日<sup>ひ</sup>  
 郷<sup>き</sup>ひ<sup>ひ</sup>ら<sup>ら</sup>み<sup>み</sup>頃<sup>ころ</sup>  
 遙<sup>は</sup>も<sup>も</sup>机<sup>つく</sup>み<sup>み</sup>が<sup>が</sup>の  
 う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>に<sup>に</sup>つ<sup>つ</sup>ち<sup>ち</sup>雨<sup>雨</sup>  
 見<sup>見</sup>け<sup>け</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>な<sup>な</sup>ま<sup>ま</sup>  
 ゆ<sup>ゆ</sup>バ<sup>バ</sup>た<sup>た</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>袖<sup>そで</sup>  
 る<sup>る</sup>計<sup>計</sup>を<sup>を</sup>つ<sup>つ</sup>庭<sup>庭</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>  
 な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>閨<sup>閨</sup>菊<sup>菊</sup>を<sup>を</sup>  
 り<sup>り</sup>す<sup>す</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>て<sup>て</sup>  
 も<sup>も</sup>夜<sup>夜</sup>  
 ま<sup>ま</sup>

都<sup>みやこ</sup>に空<sup>そら</sup>に風<sup>かぜ</sup>ひくなむ勿<sup>な</sup>れ  
 悪<sup>あく</sup>まはるまはれ  
 遠<sup>とほ</sup>れたるまはれ  
 言<sup>こと</sup>ひが身<sup>み</sup>の路<sup>みち</sup>よあるまはれ  
 姿<sup>すがた</sup>門<sup>かど</sup>邊<sup>へ</sup>に給<sup>たま</sup>るし母<sup>はは</sup>親<sup>おや</sup>のなめと  
 笑<sup>わら</sup>む顔<sup>かほ</sup>はくまは父<sup>ちち</sup>親<sup>おや</sup>れ  
 汝<sup>なんぢ</sup>の心<sup>こころ</sup>はこは好<sup>この</sup>さ  
 速<sup>はや</sup>に學<sup>まな</sup>問<sup>と</sup>を遂<sup>な</sup>げてよと  
 言<sup>こと</sup>ひ給<sup>たま</sup>へまおひの早<sup>はや</sup>や  
 眼<sup>まなこ</sup>の字<sup>あざ</sup>はせ給<sup>たま</sup>ひゆるなり  
 と影<sup>かげ</sup>はみ見<sup>み</sup>ゆるなり

栗<sup>くり</sup>賣<sup>う</sup>る乳<sup>う</sup>母<sup>はは</sup>の宿<sup>やど</sup>出<sup>い</sup>で  
 情<sup>なさけ</sup>無<sup>な</sup>い袖<sup>そで</sup>とりつ栗<sup>くり</sup>入<sup>い</sup>れ  
 いよかたこれ旅よ出でゆるる和<sup>なむ</sup>子<sup>ち</sup>て  
 さらば學<sup>まな</sup>問<sup>と</sup>を勉<sup>つと</sup>めよと  
 言<sup>こと</sup>ひたるさまのゆるるあり  
 名<sup>な</sup>残<sup>こり</sup>惜<sup>おぼ</sup>まげよ見<sup>み</sup>送<sup>おく</sup>る  
 一<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>の方<sup>かた</sup>なか免<sup>ま</sup>つ  
 人<sup>ひと</sup>の目<sup>め</sup>も避<sup>よこ</sup>さず  
 歎<sup>なげ</sup>の淵<sup>ふち</sup>よ沈<sup>しづ</sup>み見<sup>み</sup>ゆる  
 あれ少<sup>すく</sup>女<sup>め</sup>の見<sup>み</sup>ゆるあり

酒を飲みつゝ、勇み侍、  
 わせを送れ、郷いさましく  
 唱歌をうたへ、小供も  
 われを送れ、消えぬまゝ出で侍  
 福をひと消えぬまゝ出で侍  
 少松林よみゆるなるまゝ出で侍  
 折えどもひい物聲に  
 光りかともひい物聲に  
 屋根う幽かよ影くばら火の  
 庭に吹う雨の影くばら火の  
 木に葉を散らむ音なり。

花見が岡を界と去  
 北と南よ立別を  
 まよと逢瀬をのし  
 互よみやらせ返り侍  
 袖をぬらせ我友の侍  
 姿形のみゆるなり。

遠芋畑黍畑初めとし  
 早稲田晩稲田初めとし  
 福は庭石池の水草小花  
 おのが庭石池の水草小花  
 咲たが庭石池の水草小花  
 林梢の枝のゆるなり。

郷里の歎

大と小よと成る、郷里改めずんは國家何  
れの日よか改はらむ。假面と忽ち剝落す  
眞實は面影と内心にあり。

志士語りて郷里の歎をもらす、  
を聞いて此篇をなま。さとをこを一士一  
郷のみよあるべたやは。

あわれなる さとびとの  
よおしに おちいりて  
あらしめず ろくひなある

あせなる さとびとの  
うとある 日をおろそかに  
さうとある

いかに説くとも さとびの  
人のこ、ろのお、ろにて  
なくばいかでかさどらむや  
此れ此胸張りと裂々て  
此聲此音盡るとも。

うら先玄いかあ世れうへに  
ゝる愚のもれどもが  
住ぬせる愚のもれどもが  
殊ぬせるが里わが國よ聞けば



何りぬと知れば猶更に。  
 哀<sup>あは</sup>生<sup>な</sup>なるかや里<sup>さと</sup>人<sup>びと</sup>よ  
 君<sup>きみ</sup>は血<sup>ち</sup>迷<sup>まよ</sup>ひ狂<sup>くる</sup>へるか  
 人<sup>ひと</sup>は誠<sup>まこと</sup>の道<sup>みち</sup>を説<sup>と</sup>き  
 神<sup>かみ</sup>は教<sup>しゆ</sup>へよ遵<sup>したが</sup>ひて  
 正<sup>ただ</sup>まきこを言<sup>こと</sup>ふめるを。  
 なさけなきかも其胸<sup>むね</sup>を  
 裂<sup>さ</sup>れたあばきて心<sup>こゝろ</sup>をば  
 出<sup>で</sup>た磨<sup>みが</sup>る香<sup>かほ</sup>ないと清<sup>きよ</sup>く  
 汚<sup>きた</sup>れた塵<sup>ちり</sup>を推<sup>お</sup>ぬぐひ  
 惡<sup>わる</sup>し埃<sup>ほこり</sup>を字<sup>あざ</sup>ち捨てつ。  
 見<sup>み</sup>よや蓮<sup>はす</sup>れ彼<sup>かの</sup>花<sup>はな</sup>を  
 濁<sup>にご</sup>れる泥<sup>どろ</sup>水<sup>みづ</sup>ま  
 生<sup>な</sup>れつ咲<sup>さ</sup>くも清<sup>きよ</sup>ら  
 其<sup>その</sup>葉<sup>は</sup>と青<sup>あお</sup>く其<sup>その</sup>花<sup>はな</sup>は  
 人<sup>ひと</sup>の觀<sup>み</sup>賞<sup>あは</sup>れに  
 さるをまゑてや世<sup>よ</sup>の之<sup>これ</sup>に  
 人<sup>ひと</sup>と生<sup>な</sup>れも云<sup>い</sup>ふ  
 ものや長<sup>なが</sup>きも云<sup>い</sup>ふ  
 花<sup>はな</sup>に勝<sup>か</sup>る身<sup>み</sup>ならすや  
 一<sup>ひと</sup>たび深<sup>ふか</sup>き夕<sup>ゆふ</sup>霞<sup>かすみ</sup>に醉<sup>よめ</sup>ひ  
 ぬさゝび深<sup>ふか</sup>き夕<sup>ゆふ</sup>霞<sup>かすみ</sup>に醉<sup>よめ</sup>ひ

見<sup>み</sup>よや蓮<sup>はす</sup>れ彼<sup>かの</sup>花<sup>はな</sup>を  
 濁<sup>にご</sup>れる泥<sup>どろ</sup>水<sup>みづ</sup>ま  
 生<sup>な</sup>れつ咲<sup>さ</sup>くも清<sup>きよ</sup>ら  
 其<sup>その</sup>葉<sup>は</sup>と青<sup>あお</sup>く其<sup>その</sup>花<sup>はな</sup>は  
 人<sup>ひと</sup>の觀<sup>み</sup>賞<sup>あは</sup>れに  
 さるをまゑてや世<sup>よ</sup>の之<sup>これ</sup>に  
 人<sup>ひと</sup>と生<sup>な</sup>れも云<sup>い</sup>ふ  
 ものや長<sup>なが</sup>きも云<sup>い</sup>ふ  
 花<sup>はな</sup>に勝<sup>か</sup>る身<sup>み</sup>ならすや  
 一<sup>ひと</sup>たび深<sup>ふか</sup>き夕<sup>ゆふ</sup>霞<sup>かすみ</sup>に醉<sup>よめ</sup>ひ  
 ぬさゝび深<sup>ふか</sup>き夕<sup>ゆふ</sup>霞<sup>かすみ</sup>に醉<sup>よめ</sup>ひ

花たま 谿たに 谷や の 小こ 藪くさ に 三さん 度た も  
と あり とも と 路みち な く も。

霧きり を 目め け け け け け け け け け  
怪かい し き 鳥とり け け け け け け け け  
悪あく ち き 獣けもの は 斬きる 捨す て つ かる

求もと め 夢ゆめ さん 路みち 無な 花はな  
こ と と 夢ゆめ さん 路みち 無な 花はな  
鳥とり と 出い で ん か あり べ ち かる

さ と へ さ 霧きり を ふ か く と も。

心こころ を 清きよ く あ げ 葉は に 加く し  
花はな よ あ づ ら ひ 蓮はら 葉は に 加く し  
思おも ひ く ら ば よ ひ あり ん かな。

草くさ 小こ 蔓つる よ か ら ち せ てる  
深ふか き 濁にご り に 沈しづ め め ち てる  
思おも へ ば 君きみ よ 今いま 君きみ よ あり け てる  
君きみ と 斯ごと く に てる あり け てる。

斯くもて君といはま  
此世を過えよか  
越にば悔いなき  
ゆかばに其身の亡  
つひに其身の亡らむ。

知らずや君よ其  
君の心りおる  
思ひみよりかけ  
眼もひみよみ定  
思ひみよみ定め  
思ひみよみ定め

悲しむ  
胸を閉ぢゆさ鬱  
胸を閉ぢゆさ鬱

裂くるばあり  
こゝろなやまし  
さても其甲斐な  
さても其甲斐な

かひなかり無かり  
あゝあなかり無  
いかにあなかり  
いかにあなかり

まよひの塵よおは  
まよひの塵よおは  
まよひの塵よおは  
まよひの塵よおは

まことこれぬつる人や吁。

片々華葉

願とくそ神よ宥恕させ給へがえ  
われの罪をこそ全<sup>はら</sup>とく  
あるとの浮世の全<sup>はら</sup>胞<sup>から</sup>の  
はく<sup>は</sup>る<sup>る</sup>に<sup>な</sup>な<sup>な</sup>と<sup>と</sup>大<sup>おほ</sup>罪<sup>つみ</sup>を。

これはたゞ誠一ト律のこゝろにて  
願ぬな<sup>な</sup>り<sup>り</sup>れ戀<sup>こひ</sup>神<sup>かみ</sup>に  
神<sup>かみ</sup>よ<sup>よ</sup>け<sup>け</sup>そ<sup>そ</sup>給<sup>たま</sup>る<sup>る</sup>な<sup>な</sup>む  
男子<sup>おとこ</sup>女子<sup>おんな</sup>の初<sup>はつ</sup>戀<sup>こひ</sup>を。

よとへ世と悪したことのみにしげくとも

おれおそばか<sup>か</sup>り願<sup>ねが</sup>ふ<sup>ま</sup>を  
邪<sup>よこ</sup>念<sup>ねん</sup>たる人<sup>ひと</sup>をば救<sup>すく</sup>ぬ<sup>は</sup>と。

いかおせん神に聞<sup>き</sup>え給<sup>たま</sup>えらむ

愆<sup>とが</sup>いと深<sup>ふか</sup>くお<sup>お</sup>のが身<sup>み</sup>れ  
失<sup>あや</sup>す<sup>す</sup>る<sup>る</sup>も知<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>で<sup>で</sup>唯<sup>ただ</sup>愆<sup>とが</sup>に  
耽<sup>たふ</sup>る<sup>る</sup>人<sup>ひと</sup>をば救<sup>すく</sup>ぬ<sup>は</sup>道<sup>みち</sup>。

哀れさよ歎<sup>なげ</sup>く人<sup>ひと</sup>をば慰<sup>なぐさ</sup>めて

神<sup>かみ</sup>よ救<sup>すく</sup>ひ<sup>ひ</sup>て給<sup>たま</sup>る<sup>る</sup>を  
鑰<sup>かぎ</sup>の紐<sup>ひも</sup>をば打<sup>う</sup>解<sup>と</sup>愛<sup>あい</sup>て。  
悲<sup>かな</sup>ま<sup>ま</sup>の

さゝ迷ふ人れこと後をいのにせむ  
神よ教へて給へるま  
るゝるはをなき人々の  
まよひを晴らす其術を。

戀ゆゑよ身をばなび字は人あると  
いゝに救はん道なれたる  
ほかに死まべき時のあり  
身を心をあびうはとたあるを。

國の爲死する人おそすくななけれ  
神よいかゞよ思召すらむ  
浮世の人をよなともよ

國に殉<sup>し</sup>さする道なれたか。

道われと守る人な愛いのゆゑぞ  
教へのあはを疎<sup>うす</sup>かるか  
人のあゝるれさかまくて  
教を聞かぬ故なるか。

侍れあくも黄金<sup>かね</sup>よ生命<sup>いのち</sup>と殞<sup>た</sup>す人  
世よあまけりあいくばくの  
あにが寶<sup>たから</sup>なるら神れ  
神や知<sup>し</sup>り得て給ぬらむ。

とかなまと言ぬも僅<sup>わず</sup>か夢<sup>ゆめ</sup>の間<sup>ま</sup>か  
今日と暮れゆき明日と暮る

人れ生命と定まらで  
るりりるものをおあ君よ。

此世よは何を殘まて別れなむ  
死まべき人よ失まるべし

たよ遺物よ功勳れ  
光里まばゆく輝かせ

嫉妬こぼ愚の極ありあ  
おれが行ひ足らまて

おのが徳なく智なたをば  
願ましてたい人の。

いらだちつ人を罵しる愚さよ

人に罵り嘲らる  
基のわが身我にあ  
種無きものゝなと生えむ

君のたゞ我を恨まほこてるの

よかからぬおとれほるたびに  
おのが智慧なきそが故と。

花咲くや春はのどきものあらし

君よと里てのおとならし  
戀はる我れと哀れなれ。

愚

やな春と哀といぬ人の  
そと知る人す妙りき  
咲々には乱れは  
散ると云ふ死るこのあり。

悲かな

しやあ世とさ哀れをかあくて  
うれしといぬあだおとよ  
あゝあはる人そな  
世をと哀れとあつめる。

いふまぢるさらと萬れあが死をば

言はざるとても人や知る  
あゝ此世のこといも  
哀の一字にといまるを。

哀

観

いあはれと観るべき  
あはれと観んか樂まとも  
あはれと観んあな。  
情あはるるせも観死んあな。

戀もうららみも百尋の  
手繰る玉章や  
あゝ思おもふくまして  
胸よなげくも世の字をや。

涙ながらよかあつとも

神<sup>カ</sup>之<sup>ノ</sup>何<sup>ナニ</sup>處<sup>トコロ</sup>影<sup>カゲ</sup>も<sup>モ</sup>なく<sup>ク</sup>も<sup>モ</sup>  
人<sup>ヒト</sup>之<sup>ノ</sup>救<sup>タメ</sup>助<sup>タメ</sup>と<sup>ト</sup>さ<sup>サ</sup>け<sup>ケ</sup>べ<sup>ベ</sup>ど<sup>ド</sup>も<sup>モ</sup>  
願<sup>カガ</sup>慮<sup>リ</sup>も<sup>モ</sup>せ<sup>セ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>世<sup>ヨ</sup>れ<sup>レ</sup>う<sup>ウ</sup>を<sup>ヲ</sup>や<sup>ヤ</sup>。

救<sup>タメ</sup>助<sup>タメ</sup>ど<sup>ド</sup>も<sup>モ</sup>見<sup>ミ</sup>ざる<sup>ズ</sup>か<sup>カ</sup>さ<sup>サ</sup>る<sup>ル</sup>人<sup>ヒト</sup>は<sup>ハ</sup>  
石<sup>イシ</sup>と<sup>ト</sup>も<sup>モ</sup>尊<sup>タカ</sup>み<sup>ミ</sup>か<sup>カ</sup>え<sup>エ</sup>お<sup>オ</sup>み<sup>ミ</sup>て<sup>テ</sup>は<sup>ハ</sup>  
い<sup>イ</sup>と<sup>ト</sup>も<sup>モ</sup>尊<sup>タカ</sup>み<sup>ミ</sup>か<sup>カ</sup>え<sup>エ</sup>お<sup>オ</sup>み<sup>ミ</sup>て<sup>テ</sup>は<sup>ハ</sup>  
よ<sup>ヨ</sup>と<sup>ト</sup>も<sup>モ</sup>尊<sup>タカ</sup>み<sup>ミ</sup>か<sup>カ</sup>え<sup>エ</sup>お<sup>オ</sup>み<sup>ミ</sup>て<sup>テ</sup>は<sup>ハ</sup>  
や<sup>ヤ</sup>。

怨<sup>ウラミ</sup>と<sup>ト</sup>嫉<sup>イデ</sup>妬<sup>ヤ</sup>に<sup>ニ</sup>お<sup>オ</sup>ろ<sup>ロ</sup>を<sup>ヲ</sup>こ<sup>コ</sup>  
あ<sup>ア</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>溶<sup>ト</sup>か<sup>カ</sup>え<sup>エ</sup>し<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>  
鬼<sup>キ</sup>の<sup>ノ</sup>怒<sup>イラ</sup>に<sup>ニ</sup>猶<sup>ナ</sup>や<sup>ヤ</sup>勝<sup>マ</sup>る<sup>ル</sup>  
姿<sup>サマ</sup>形<sup>ガタ</sup>よ<sup>ヨ</sup>に<sup>ニ</sup>た<sup>タ</sup>る<sup>ル</sup>世<sup>ヨ</sup>れ<sup>レ</sup>う<sup>ウ</sup>へ<sup>エ</sup>や<sup>ヤ</sup>。

に<sup>ニ</sup>く<sup>ク</sup>し<sup>シ</sup>思<sup>オモ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>し<sup>シ</sup>い<sup>イ</sup>き<sup>キ</sup>に<sup>ニ</sup>  
知<sup>チ</sup>り<sup>リ</sup>つ<sup>ツ</sup>ゝ<sup>ヅ</sup>悪<sup>アク</sup>し<sup>シ</sup>い<sup>イ</sup>き<sup>キ</sup>に<sup>ニ</sup>  
こ<sup>コ</sup>も<sup>モ</sup>勇<sup>ユウ</sup>気<sup>キ</sup>る<sup>ル</sup>世<sup>ヨ</sup>の<sup>ノ</sup>上<sup>ノ</sup>や<sup>ヤ</sup>。

限<sup>リミ</sup>り<sup>リ</sup>も<sup>モ</sup>な<sup>ナ</sup>ら<sup>ラ</sup>ず<sup>ズ</sup>世<sup>ヨ</sup>の<sup>ノ</sup>う<sup>ウ</sup>へ<sup>エ</sup>の<sup>ノ</sup>  
あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>ず<sup>ズ</sup>は<sup>ハ</sup>あ<sup>ア</sup>き<sup>キ</sup>こ<sup>コ</sup>と<sup>ト</sup>も<sup>モ</sup>れ<sup>レ</sup>。

い<sup>イ</sup>か<sup>カ</sup>ら<sup>ラ</sup>な<sup>ナ</sup>い<sup>イ</sup>か<sup>カ</sup>に<sup>ニ</sup>観<sup>カン</sup>む<sup>ム</sup>  
あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>ず<sup>ズ</sup>は<sup>ハ</sup>あ<sup>ア</sup>き<sup>キ</sup>こ<sup>コ</sup>と<sup>ト</sup>も<sup>モ</sup>れ<sup>レ</sup>。



微

衷

正義無たものまさに死すべし、慈悲心無  
 たものまさは死すべし、正ましく義なく、  
 慈悲心あたもの何をせざ妄りに世間を要  
 せむや、人をくるまめ、世をくるまめ、  
 べつと私利にのま狂奔するもれ、何をれ  
 ぞ妄りに國家を要せんや、忠をしらず孝  
 をわまれ、信を壊ち、平和を破り、且と  
 愛人愛國愛世れ念なたもの、奸佞巧曲邪  
 智よのみこれ耽り不仁不徳更に爲すある  
 なたもれ、何すをぞ妄りよあれを人に要  
 せむや、愚昧未だ可あざ、さらよその智

有り識あり學あるもれよ至はて無情冷淡  
 愛世愛國の念なきもれに至はてとあれ先  
 づまさに宜しく死すべし、世人とまさに  
 平和れ與樂と望死するものなり清美の境を  
 欲するものあり、正義と徳とを好めるも  
 れなり、人と國とを愛するものなり、誠  
 と熱とを有するものなり、正と不正とを  
 知るもれあり、涙と血とをたもてるもの  
 なり、肉と骨とを有するもれなり、其も  
 しあれを嫌ひ、その若まあれを望まずこ  
 れを害し、これを捨て、あを願ざるもの  
 よ至てとこを更よ語るに足らざるれみ、  
 宜しくこれらと死すべたのみ、畢竟人ろ  
 を此世に生れて先づ何をるもれぞ

おのが希望を敷ぬをば  
おのに一ツの外と無  
字き世の人のこと  
正まに道にまはさ  
おの道にまはさ  
おの道にまはさ

君親たらば其親の  
なすべきゆとめり  
君もま子とめり  
子とるつとめり  
まあとを美しく  
上か  
おそのの好む其道  
おそのの好む其道

誠おろそぎて  
つ糸よろそぎて  
とる悪魔の襲ふ  
とる悪魔の襲ふ

國の利益を増進し  
世の智慧を開發  
有情無情の富を  
いと無情の富を  
いと無情の富を

柿  
比  
實  
弟

いさろはつたぬ此枝の  
さたつかおろ未だ青く  
しぶかりつゝもかゝり  
今は今いゝなり  
採らばやまゝ  
これ好く  
あはれそがよ  
あはれそがよ

姉

落ちたまかきよ  
氣づかひてこゝろ配  
れたはたまはるみ  
はたまはるみ

柿の枝之特にもろか  
さまゝの木のあるうち  
は、まゝ先な氣をばつ  
もしもやな落ちまゝ  
悔ゆるともそのかひな  
ん。

弟

あはれね君のありが  
さらば此木を下るな  
落ちて悔ゆるもかひ  
どちく惜むもかひ  
もぎ取りつゝとま  
枝を折りつゝとま

柿之袂たもとよ五ツあ  
分なまのよ半なまをば。

姉

わのや取とりたるの速はやかりし  
姿すがたあはれは落ちたるのき  
思おもひ煩わづらひ入いる身を  
葉はかげよ煩わづらひ仰あがぎ見みは  
熊くまくくと視み汝なが手てのみ見みは  
さるを危あやふたりこと見みは  
くさるを危あやふたりこと見みは  
くだりけるかも嬉うれまやな。

弟

分わのよ半なまをば。  
好このめたるを撰えび給たまはるも  
半なまと云いひたりるも  
六むつなりと七なつなるとも  
そはねの心こころあかせよ  
字あれししくも喜よろこぶか  
あはれししくも喜よろこぶか  
わのよ半なまをば。

姉

汝美言義ち勇ささ  
が玄ひれまる  
誠の侍た玄まよ  
實り言いかて  
の侍ぬ玄りこ  
と汝べきそ  
とひきいえ  
さこ言子さ人  
ら、ひとぎと  
よろにもよ云  
香れくひ

姉

まあと情物  
おは、なの  
とれろき寶  
の誠まをかを  
途實ま亂な争  
ひをし各ひ  
に失氣々て  
隠かひをよ  
滅く侍馳  
るせて  
とも。

血ちいえ  
汐しのく  
よにと  
そ此も  
と世あ  
てとね  
且紅くよ  
をのまこ  
ひととを  
、

弟

數あ其ま命いのち一ひなご汝う  
多たま終を、人り侍れを  
のごぬ汝すかまし  
人ままよらいおい  
にこで汝ないとの  
しと失りたやのあ  
け世せの弟あおと字  
よのやあのあとされ  
の字ら、侍らしや  
しへでろのらしに  
れ

勉 然 や し け や 其 ま あ と  
勵 る て 人 に し け よ か し。

寫 眞

眼 まきよ 霞 つゆの 白 玉 を  
浮 べ 袖 よ ち ら け と  
胸 の く も 里 や ち ら して  
二 十 歳 よ 余 る 姫 君 と  
玄 ば 玄 息 を も つ が 得 ず  
聲 も あ は せ や 枯 ら け ぬ  
お 思 へ と 定 め し が  
い か で 思 へ と 定 め し が

な ぞ て 忘 れ て あ り け べ  
胸 の 張 り 裂 く ば か り なる  
お ち 空 お 飛 び ち け  
雲 と ち 立 ち 重 里 ぬ。

去 年 此 彌 生 の こと あり け  
妾 の 乳 母 と も にも  
今 日 や 明 日 や 待 ち に 待 ち  
袖 を け け 野 邊 を 歩 み けり。  
長 閑 け き 野 邊 を 歩 み けり。

次 第 く 山 越 え かく  
霞 々 々 山 ぬ かく

薫を傳ぬ櫻谷  
懐しや  
未だ咲きやらぬ花つぼみ  
満てるわの木の花に蝶。

ひらり〜とニッ  
舞ひのしつ、樂しげに  
遊ぶを見たり、  
お、情なき我が夫よの時よ  
何を恨みよもの言はで  
斯くおぬすまゑ給ふや。  
言ひつゝ、姫はしばし  
眼を手のもて押ぬぐひ

怪

々

袖れうちある寫眞をば  
取出え、  
お、あはれ、  
蝶れ遊びをみえとたに。

あ、あのほれた彼の言葉  
今もよく〜胸よあ  
さるを今とえのい  
忘れやらじふ喃夫よ  
夫が語りし情をば  
るさるもの言とで…。

怪<sup>あ</sup>た<sup>た</sup> 四<sup>あ</sup>邊<sup>り</sup> 視<sup>み</sup>た 音<sup>ね</sup>よ 夢<sup>ゆめ</sup>さ 先<sup>ま</sup>て  
衣<sup>ころも</sup> 蹴<sup>け</sup>立<sup>た</sup>て 侍<sup>さむらい</sup> 起<sup>お</sup>上<sup>り</sup>り 人<sup>ひと</sup>の 聲<sup>こゑ</sup>

奇<sup>く</sup> 玄<sup>げん</sup> 聲<sup>こゑ</sup>よ 聞<sup>き</sup>た 聞<sup>き</sup>た 聞<sup>き</sup>た 聞<sup>き</sup>た  
耳<sup>みみ</sup> 字<sup>じ</sup> ち 玄<sup>げん</sup> 能<sup>よ</sup>く 聞<sup>き</sup>たり 聞<sup>き</sup>たり 聞<sup>き</sup>たり  
黄<sup>わう</sup> 金<sup>きん</sup> を 欲<sup>ほ</sup> 玄<sup>げん</sup> 欲<sup>ほ</sup> 玄<sup>げん</sup> 愛<sup>あい</sup> かな ば め  
た と へ 此<sup>こゝ</sup> 身<sup>み</sup> を 玄<sup>げん</sup> づ 先<sup>ま</sup>て も ……

あ  
わ  
れ

あ 人の かな 世<sup>よ</sup>の さ ず や  
あ 人の かな 世<sup>よ</sup>の さ ず や  
あ 人の かな 世<sup>よ</sup>の さ ず や  
あ 人の かな 世<sup>よ</sup>の さ ず や  
あ 人の かな 世<sup>よ</sup>の さ ず や  
あ 人の かな 世<sup>よ</sup>の さ ず や  
あ 人の かな 世<sup>よ</sup>の さ ず や  
あ 人の かな 世<sup>よ</sup>の さ ず や  
あ 人の かな 世<sup>よ</sup>の さ ず や  
あ 人の かな 世<sup>よ</sup>の さ ず や

聞<sup>き</sup> け ば 聞<sup>き</sup> く 涙<sup>なみだ</sup> な 里<sup>さと</sup> へ  
見<sup>み</sup> ば 見<sup>み</sup> る は 涙<sup>なみだ</sup> な 里<sup>さと</sup> へ  
見<sup>み</sup> ば 見<sup>み</sup> る は 涙<sup>なみだ</sup> な 里<sup>さと</sup> へ  
見<sup>み</sup> ば 見<sup>み</sup> る は 涙<sup>なみだ</sup> な 里<sup>さと</sup> へ  
見<sup>み</sup> ば 見<sup>み</sup> る は 涙<sup>なみだ</sup> な 里<sup>さと</sup> へ  
見<sup>み</sup> ば 見<sup>み</sup> る は 涙<sup>なみだ</sup> な 里<sup>さと</sup> へ  
見<sup>み</sup> ば 見<sup>み</sup> る は 涙<sup>なみだ</sup> な 里<sup>さと</sup> へ  
見<sup>み</sup> ば 見<sup>み</sup> る は 涙<sup>なみだ</sup> な 里<sup>さと</sup> へ  
見<sup>み</sup> ば 見<sup>み</sup> る は 涙<sup>なみだ</sup> な 里<sup>さと</sup> へ  
見<sup>み</sup> ば 見<sup>み</sup> る は 涙<sup>なみだ</sup> な 里<sup>さと</sup> へ

あ の 浮<sup>う</sup> 世<sup>よ</sup> づ 先<sup>ま</sup> 思<sup>し</sup> 立<sup>た</sup> っ 胸<sup>むね</sup> の は 涙<sup>なみだ</sup> あり  
あ の 浮<sup>う</sup> 世<sup>よ</sup> づ 先<sup>ま</sup> 思<sup>し</sup> 立<sup>た</sup> っ 胸<sup>むね</sup> の は 涙<sup>なみだ</sup> あり  
あ の 浮<sup>う</sup> 世<sup>よ</sup> づ 先<sup>ま</sup> 思<sup>し</sup> 立<sup>た</sup> っ 胸<sup>むね</sup> の は 涙<sup>なみだ</sup> あり  
あ の 浮<sup>う</sup> 世<sup>よ</sup> づ 先<sup>ま</sup> 思<sup>し</sup> 立<sup>た</sup> っ 胸<sup>むね</sup> の は 涙<sup>なみだ</sup> あり  
あ の 浮<sup>う</sup> 世<sup>よ</sup> づ 先<sup>ま</sup> 思<sup>し</sup> 立<sup>た</sup> っ 胸<sup>むね</sup> の は 涙<sup>なみだ</sup> あり  
あ の 浮<sup>う</sup> 世<sup>よ</sup> づ 先<sup>ま</sup> 思<sup>し</sup> 立<sup>た</sup> っ 胸<sup>むね</sup> の は 涙<sup>なみだ</sup> あり  
あ の 浮<sup>う</sup> 世<sup>よ</sup> づ 先<sup>ま</sup> 思<sup>し</sup> 立<sup>た</sup> っ 胸<sup>むね</sup> の は 涙<sup>なみだ</sup> あり  
あ の 浮<sup>う</sup> 世<sup>よ</sup> づ 先<sup>ま</sup> 思<sup>し</sup> 立<sup>た</sup> っ 胸<sup>むね</sup> の は 涙<sup>なみだ</sup> あり  
あ の 浮<sup>う</sup> 世<sup>よ</sup> づ 先<sup>ま</sup> 思<sup>し</sup> 立<sup>た</sup> っ 胸<sup>むね</sup> の は 涙<sup>なみだ</sup> あり  
あ の 浮<sup>う</sup> 世<sup>よ</sup> づ 先<sup>ま</sup> 思<sup>し</sup> 立<sup>た</sup> っ 胸<sup>むね</sup> の は 涙<sup>なみだ</sup> あり

あ の 世<sup>よ</sup> の 恨<sup>うらみ</sup> ら ぬ 玄<sup>げん</sup> や  
あ の 世<sup>よ</sup> の 恨<sup>うらみ</sup> ら ぬ 玄<sup>げん</sup> や  
あ の 世<sup>よ</sup> の 恨<sup>うらみ</sup> ら ぬ 玄<sup>げん</sup> や  
あ の 世<sup>よ</sup> の 恨<sup>うらみ</sup> ら ぬ 玄<sup>げん</sup> や  
あ の 世<sup>よ</sup> の 恨<sup>うらみ</sup> ら ぬ 玄<sup>げん</sup> や  
あ の 世<sup>よ</sup> の 恨<sup>うらみ</sup> ら ぬ 玄<sup>げん</sup> や  
あ の 世<sup>よ</sup> の 恨<sup>うらみ</sup> ら ぬ 玄<sup>げん</sup> や  
あ の 世<sup>よ</sup> の 恨<sup>うらみ</sup> ら ぬ 玄<sup>げん</sup> や  
あ の 世<sup>よ</sup> の 恨<sup>うらみ</sup> ら ぬ 玄<sup>げん</sup> や  
あ の 世<sup>よ</sup> の 恨<sup>うらみ</sup> ら ぬ 玄<sup>げん</sup> や



秋の夜

其一

こゝろまづけた秋の夜に  
わが家立出で眺むれば  
瀛車は煙もろくも  
北南はたかなびきて  
北の川原のたかひくあり  
天の音とるかひくあり  
鐘の音とるかひくあり

其二

こゝろまづけた秋の夜に

ひのきと立出で影がむれば  
木の間に月乃影清くむれば  
星の光りと字をらぎて  
草葉のかりげのたりあつ  
おゝるあがりげのたりあつ

其三

庭に下り立ちた種  
露の葉おどれよ武蔵野の  
草の葉おどれよ武蔵野の  
鳴るるか昔の虫あはれな  
庭に下り立ちた種  
露の葉おどれよ武蔵野の  
草の葉おどれよ武蔵野の  
鳴るるか昔の虫あはれな

其四

空 明<sup>あ</sup>北 雲 籬<sup>まがき</sup> <sup>お</sup> <sup>ろ</sup>  
は 日<sup>ひ</sup>と 東<sup>あ</sup>の 絲<sup>いと</sup> 寄<sup>よ</sup> <sup>ろ</sup>  
と と<sup>す</sup>雨<sup>あめ</sup> 通<sup>と</sup>い と な ち 受<sup>う</sup> 種<sup>むね</sup> 地<sup>ぢ</sup> 夜<sup>よ</sup> ぶ  
よ み 降<sup>ふ</sup>る ぬ し な 里<sup>さと</sup> く む 生<sup>なま</sup> ば  
ぬ 何<sup>なに</sup>と る 玄<sup>くろ</sup> と や  
なく。

其五

野<sup>の</sup> 邊<sup>へ</sup> <sup>ろ</sup> <sup>ま</sup> <sup>づ</sup> <sup>き</sup> <sup>種</sup> <sup>は</sup> <sup>夜</sup> <sup>に</sup>  
に 立<sup>た</sup> 出<sup>で</sup> ち 種<sup>むね</sup> 生<sup>なま</sup> ば

空<sup>そら</sup> 蔭<sup>かげ</sup> 年<sup>とし</sup> <sup>ま</sup> <sup>ち</sup> <sup>ら</sup> <sup>は</sup> <sup>く</sup> <sup>の</sup> <sup>赤</sup> <sup>く</sup>  
た ぬ 豊<sup>ゆたか</sup> と 聲<sup>こゑ</sup> 々<sup>々</sup> に 聞<sup>き</sup> ゆ な り。

其六

家<sup>いえ</sup> 門<sup>かど</sup> 出<sup>で</sup> ち 種<sup>むね</sup> 生<sup>なま</sup> ば  
み 所<sup>ところ</sup> の 月<sup>つき</sup> の い や 清<sup>きよ</sup> く  
西<sup>にし</sup> の 山<sup>やま</sup> 手<sup>て</sup> に 笛<sup>ふえ</sup> け 音<sup>ね</sup> の  
い と お も し ろ く ひ 吹<sup>ふ</sup> く 笛<sup>ふえ</sup> ち ら む。

其七

こゝろしつらき秋は夜よ  
かゝると立ち出でて眺むれば  
ひいとやかく月の影きよく  
袖ととほむ立ちたる少女子は  
彼方よは歌の聲のしらすま

其八

おゝろしづらなる秋の夜よ  
友と連立ちなむれば  
田の面神とひそく  
と

其九

獨りうさふてぬまを  
みのれやみぬれあゝ稲よ  
此いや照れる月の夜に

其十

おゝろしつらき秋の夜よ  
月の照る郷あはれれば  
しるた煙とふらばなり  
賤る草屋にのぼるなり  
遠き彼方これ山邊よ  
字たぬ馬子れ聲の去て

あゝろまづりたき秋れ夜に  
川邊に出でなむをよ  
浪よ漂ふ月かげのむを  
いとまばゆくも見え  
葦の葉かげに宿りせし  
小鳥とるひを飛び出でり。

其十一

あゝろまづりたき秋れ夜に  
わやしたもとのながむれば  
いとつか亡びし武夫の  
あと吊へし墓標

月と朧よ露しげく  
通りすがらの道ながら。

其十二

あゝろしづけき秋の夜に  
山の麓をちがむれば  
獵師の家庭園にすおく  
立てる柿の木もすおく  
月れ照る添ふ軒の端よ  
狐鳴くかど覺ゆなま。

其十三

あゝろしづき秋は夜よ  
海邊とるるにながむれば  
海士が焚く火のちらくと  
或と消はば燃えは  
夜半はぼろ狭霧のいや立ちて

其十四

こゝろしづけた秋の夜ふ  
門を越ゆでながむきは  
雲を越ゆく月まろく  
柳の小田にさくさくと  
稻刈る音れひやくなり

男女の字さひは

其十五

とろまづた秋の夜に  
折戸ひらきつながむを  
向ひる山に月出で  
此方の巖照らすなり  
木の葉吹く風音をむく  
谷の流の聲のまて

其十六

こゝろしづけた秋の夜よ

草<sup>いほ</sup>立<sup>り</sup>出<sup>で</sup>な<sup>が</sup>む<sup>む</sup>し<sup>ば</sup>  
數<sup>あま</sup>多<sup>た</sup>れ<sup>れ</sup>星<sup>た</sup>と<sup>と</sup>き<sup>き</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>  
空<sup>あ</sup>に<sup>に</sup>み<sup>み</sup>ち<sup>ち</sup>満<sup>み</sup>ち<sup>ち</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>ま<sup>ま</sup>な<sup>な</sup>り  
穂<sup>ほ</sup>浪<sup>なみ</sup>う<sup>う</sup>は<sup>は</sup>田<sup>た</sup>よ<sup>よ</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>  
や<sup>や</sup>ど<sup>ど</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>露<sup>つゆ</sup>を<sup>を</sup>て<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>は<sup>は</sup>。

其十七

こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>げ<sup>げ</sup>た<sup>た</sup>秋<sup>あき</sup>の<sup>の</sup>夜<sup>よ</sup>に<sup>に</sup>  
み<sup>み</sup>そ<sup>そ</sup>ら<sup>ら</sup>仰<sup>あや</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>が<sup>が</sup>む<sup>む</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>  
あ<sup>あ</sup>よ<sup>よ</sup>ひ<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>月<sup>つき</sup>の<sup>の</sup>影<sup>かげ</sup>清<sup>きよ</sup>く<sup>く</sup>  
山<sup>やま</sup>の<sup>の</sup>彼<sup>か</sup>方<sup>た</sup>に<sup>に</sup>夜<sup>よ</sup>鴉<sup>から</sup>の<sup>の</sup>清<sup>きよ</sup>く<sup>く</sup>  
聲<sup>こゑ</sup>い<sup>い</sup>や<sup>や</sup>高<sup>たか</sup>く<sup>く</sup>鳴<sup>な</sup>た<sup>た</sup>は<sup>は</sup>を<sup>を</sup>て<sup>て</sup>  
哀<sup>あは</sup>し<sup>し</sup>く<sup>く</sup>身<sup>み</sup>よ<sup>よ</sup>添<sup>そ</sup>ひ<sup>ひ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>。

其十八

あ<sup>あ</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>げ<sup>げ</sup>た<sup>た</sup>秋<sup>あき</sup>の<sup>の</sup>夜<sup>よ</sup>に<sup>に</sup>  
は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>田<sup>た</sup>の<sup>の</sup>面<sup>おもて</sup>な<sup>な</sup>が<sup>が</sup>む<sup>む</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>  
な<sup>な</sup>が<sup>が</sup>む<sup>む</sup>る<sup>る</sup>限<sup>かぎ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>や<sup>や</sup>清<sup>きよ</sup>し<sup>し</sup>  
穂<sup>ほ</sup>首<sup>くび</sup>揃<sup>そろ</sup>る<sup>る</sup>稲<sup>いね</sup>の<sup>の</sup>上<sup>うへ</sup>を<sup>を</sup>  
雲<sup>くも</sup>無<sup>な</sup>き<sup>き</sup>空<sup>そら</sup>の<sup>の</sup>十<sup>じゅう</sup>六<sup>じゅう</sup>夜<sup>よ</sup>れ<sup>れ</sup>  
月<sup>つき</sup>が<sup>が</sup>ら<sup>ら</sup>お<sup>お</sup>照<sup>て</sup>り<sup>り</sup>添<sup>そ</sup>る<sup>る</sup>て<sup>て</sup>

其十九

こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>げ<sup>げ</sup>た<sup>た</sup>秋<sup>あき</sup>の<sup>の</sup>夜<sup>よ</sup>に<sup>に</sup>  
し<sup>し</sup>づ<sup>ず</sup>か<sup>か</sup>る<sup>る</sup>海<sup>うみ</sup>の<sup>の</sup>面<sup>おもて</sup>な<sup>な</sup>が<sup>が</sup>む<sup>む</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>

水よ字はれる川清く  
折吹く風よ波立ちて  
金魚飛ぶかど覺ゆあ  
ちらましくと輝きて。

其二十

あゝろしづかに種れ夜よ  
道を歩むはながむれと  
十日は中空のあり  
雲の彼方に、ある  
稲刈る人のかゝるの  
ひびきは山よ絶えずして

其二十一

あゝろしづかに種れ夜よ  
谿に下りてあがむをば  
岩に生ひたる山菊は  
水をけろて眠るなり  
く先ば小桶よ影さえて  
月情の思はをほ。

其二十二

あゝろしづかに種れ夜よ  
丘の森はてながむれに  
野宮の森はてながむれに

風にゆるるげるさまを  
雲とちらく動れた  
月之隠れつまゝ見えは

其二十三

お、ろしづりき秋の夜に  
山に登りてあがむをば  
ながむる里のあげ清き  
月は海面よりあらそれて  
ぬもとれ野邊に鳴く虫の  
聲さわやあ聞ゆな

其二十四

あ、ろしづりき秋の夜に  
宿の窓をながむれば  
照らまき月影いと清く  
うはるる木れ枝のおも  
はるると動れたはとま  
はるると動れたはとま

其二十五

お、ろしづりき秋の夜に  
太刀を取るげき秋の夜に  
月のひをとり出でなむ  
抜くや忽ちあ寒し



龍たつ紫むらさとい  
躍たぎるの氣  
ぬ大たい空くら立ち  
よ。

其二十六

こゝろしづけき秋れ夜お  
菊の畑をちがむれば  
小ちさやま童わらわと立ちぬ  
あやまきもとのちぬ  
やがて包むすらべの聲こゑ高たかく  
月つきをながめよ出いでよ

其二十七

こゝろまづけき秋の夜に  
向むかひる路みちをあがむば  
わゝる男おとこの月つきかげに  
歌うたよみながら吹ふきけり  
彼か處ちを呼よぶらみぬよ  
たを此こゝ處ち歩あらむらよ

其二十八

おろまづけき秋の夜に  
柴しばを折をりつゝあがむを  
やま松まつの少すく女むすめよる  
月つき照てるなながらよ來きり

まろき雲くも上うへにまゝがまて。

其二十九

こゝろしづけた秋あきは夜よま  
まばまばま雲くもぬをながむきば  
花はなの冠かむりをいたて  
神かみは来きたたりて  
罪つみあはる人を救すくふと  
いや照ある月つきよ聲こゑあげて

其三十

あゝろしづけた秋あきの夜よ

まの月つきの蔭かげよ月つきをながむれば  
男おとこのひと里さとあむかれば  
わかれを呼よびてと誘まねふなりて  
此こゝ方の空そらに來きたたまへと。

其三十一

こゝろは雲くもとらき秋あきの夜よま  
みそらに雲くもとあむれば  
西にしト東ひがしよひて  
赤あかた薄うす雲くもいやは白しろた  
雲くもと互あひひま遊あそぶな里さと  
或あると高たかくまゝひく。

其三十二

こゝろをなげた秋の夜に  
雲立つ峰をながむ星ば  
星は三ツ五ツとらく  
散りてとやかてくだる  
人れおゝろに氣づく  
風も吹た來ぬ音たてゝ

其三十三

このろしづながむれに  
園の小花をながむれば

其三十四

コスモス月の影を浴び  
ドロステス石の陰を  
小菊セロシヤサルウキヤ  
露よぬれば、糸むるあり

この、通る路なびた秋の夜よ  
雲の、なるがむれば、  
故郷とるゝしはばしてぬ  
戀しきたおもしろいや増してぬ  
昨日來つゝしおとどづれは  
見たりつゝもどるは

其三十五

こゝろしづけた種  
の夜に  
見るともなま  
になむれば  
田中よ立ちて  
る破れ案山子  
人どばのり  
に見ゆるあり  
月はくまき  
く照らしつゝ  
光りのいと  
いとき  
清けをど。

其三十六

あゝろまづり  
た種  
の夜よ  
障子明々  
津、あがむ  
れば  
風とまづ  
かよ浪  
立たず

とるか彼方の燈臺  
の  
光る海面照らす  
な  
漁船の笛の音  
れして。

其三十七

あゝ、後しづ  
々き  
秋の夜よ  
流よ立ちて  
あがむ  
をば  
躍るかぢ  
の音た  
るく  
稍にさわ  
ぐ松風の  
雲を率ぬ  
ていづ  
まかに  
月れ傍を  
離れけり

其三十八

お、ろしづけき秋の夜に  
遠の山里ながむれば  
月の光をのゝがやけど  
墨繪のおとく臙けよ  
森か人家の野か道の  
さてもいゝなきまなこかな。

其三十九

お、ろしづけた種之夜よ  
家の軒端をながむれば  
月にうつれるくも糸の  
いといやさしく光るな

糸の主いと追ひぬる。  
上を下へと駆けめぐる。

共四十

お、ろしづけた種之夜に  
糸爪の棚をちがむまば  
風よゆらまて右左里  
人のわらひをかもすな  
月の都は今とまもつらむ。  
いかよ樂しくありつらむ。

其四十壹

あゝろしづりた秋の夜に  
そいゝるにが身をまがむをば  
月あ浮かれて唯ひとり  
よまなきおとをかおほは  
雲と笑ひむあおろか  
風となきなむあはまやと。

其四十二

あゝろすけき秋の夜よ  
柴垣根をながむれば  
黄菊紅菊一二輪  
露にまをれてよくと  
風れまよくとゆるぐあり

月と端山よ近ずたて。

其四十三

あゝろしづりた種  
林橘れ枝を眺むれば  
月夜あぶらも葉の蔭に  
見える四ツ五ツ心よき  
明すて探るむいざさ  
探るてさいげむまづ神に。

其四十四

あゝろまづけき秋の夜に

音な鳴な子こををるる方かたををああががむむれればば  
雀すずめ追おぬぬににははとともも  
人ひとれれ夢ゆめををばばききすすあありり  
月つきはは隠かくれれぬぬ雲くも蔽おほひひ。

其四十五

こころろししづづけけきき秋あきはは夜よああばば  
おおれれががいいややををななががむむれればば  
軒のきののううちちよよりりてて月つきききよよくく  
棟むねののううちちよよりりててららままななるる  
露つゆののううちちよよりりててららままななるる  
石いしののううちちよよりりててららままななるる

其四十六

ああららししづづななががむむれればば  
天あまののううちちよよりりててららままななるる  
月つきののううちちよよりりててららままななるる  
稻いねののううちちよよりりててららままななるる  
聲こゑののううちちよよりりててららままななるる  
宵よるののううちちよよりりててららままななるる

其四十七

ああららししづづななががむむれればば  
戀こひののううちちよよりりててららままななるる  
玉たまののううちちよよりりててららままななるる  
章あきらののううちちよよりりててららままななるる  
ななががむむれればば  
夜よるののううちちよよりりててららままななるる

あま男よ  
まいりお  
るやと  
涙をを  
はよら  
じな咽打  
此ぶ伏  
後あ去  
は。里て  
ど  
ろ

其四拾八

う道は残くこ  
よゆるんら、  
よくかのをろ  
涙人の葉夜ま  
のの里火のづ  
ひ聲よちなけ  
いかもかとき  
きあゆく眺秋  
あ、るなば夜  
り

其四十九

字權月漕沖あ  
たどはたの、  
ぬる雲ゆ彼ろ  
里人間く方ま  
唄れを船をづ  
れ聲離の眺け  
あゑるおれき  
、かあもば秋  
さくりしろ夜  
むのろくよ

其五十

空何こ  
を處、  
見とろ  
よもし  
れなづ  
るくけ  
あなた  
りが秋  
がむれ  
絲を夜  
のばよ



いどほとせよ聞ゆあり  
さゝるひが浦の芦の根に  
千鳥のゑとす聲もしつ。

其五十一

こゝろまづき秋の夜よ  
湖の水るるなむをば  
彼方の岸に螢火のを  
小さく輝た見ゆるあ  
海士が苦屋れ櫓の火と  
かしくおもえはくあら

其五十二

こゝろしづけき秋の夜に  
交ひるときてあがむれば  
磯うつ浪の音すおくれ  
庭よ落ち來る柿の葉お  
胸おどろきほさわか  
わとせさびえさいやま

唯 一笑

愚男の千言一笑の價だよもせず、千篇一  
律愚婦の痴情をあらべたるに似たり。お  
れ此集れ評なるかな。おれ先づ見てお  
のれ評せば斯れ如たのみ。然りと雖も、

人魂つひに先づ滅するからず、永劫の字  
ち或といふなることを吐た、いゝなるこ  
とと言ふや未だ計り知るべからず、……  
云ふことをまゝ愚婦の痴情ならざらむや。  
言へばまゝく、愚にまて、語れといよく  
痴あり、つひよ一笑の香たも、鼻ぐ能と  
ざるよ至らむ。恐るべきかな、恐るべきか。

三千世界よ一ト丸先  
握りてるがて團子となして  
鬼界ヶ嶋れ鬼退治とと  
おれもむのりの嘶なるゝな

愚夫詠

草

蘆

集

時雨  
れ卷

終

正誤に就而

一点の誤り能く意義に千里の差と來し、一畫れ謬り能く意味  
よ雪墨の差と生ず、況んや其一字一句の誤謬に於てをや、今此  
書を印刷し畢つて、おをを閱するに、其誤謬一二にして止まら  
ず、依りて重よ其意義と口調は關係を來よ所等のを訂し、  
其他いとひ、おとは、等の誤りを一々おれを訂正せず、蓋しお  
れ、世人が其正まきを知り、又其誤りを知るとまふべければ也。

頁	行	誤	正
一五	四行目	うら	うち
二〇	十一同	かぬて	かぬて
二七	六同	清く	高く
三〇	四同	ならせや	のらせず
三五	四同	あるを	あるを
四二	一同	様が	様の
四四	十四同	絶へて	絶えで

一六〇 四行目  
 一六九 左ヨリ一行目  
 一八二 左ヨリ四行目  
 一八四 〃 五行目  
 一八五 一行目  
 全頁 左ヨリ七行目  
 一八九 左ヨリ七行目  
 一九一 二行目  
 全頁 左ヨリ一行目  
 一九二 一行目  
 全頁 九行目  
 最初十頁 七行目  
 全九頁 左ヨリ三行目

見え。 なが。 見ゆ。  
 が。 なが。 なが。  
 えず。 えず。 えず。  
 えず。 えず。 えず。  
 近ず。 近ず。 近ず。  
 心よき。 心よき。 心よき。  
 小唄。 小唄。 小唄。  
 文ひも。 文ひも。 文ひも。  
 評せば斯の。 評せば先づ斯くの。  
 つひに滅す。 つひに滅す。  
 つひに先づ滅す。  
 へがて。 やがて。  
 花まだ。 花いまだ。  
 あらず。 あらじ。

なきや。 繋ぎ。 繋ぎ。  
 雪を。 雪を。 雪を。  
 とも。 とも。 とも。  
 言葉。 言葉。 言葉。  
 かね。 かね。 かね。  
 味。 味。 味。  
 めた。 めた。 めた。  
 とも。 とも。 とも。  
 近ず。 近ず。 近ず。  
 影。 影。 影。  
 世。 世。 世。  
 あれ。 あれ。 あれ。  
 とら。 とら。 とら。

五二 二同  
 五〇 左ヨリ九同  
 六二 七同  
 〃 全同  
 六九 左ヨリ三同  
 七三 十四同  
 一〇一 十一同  
 一一〇 十三同  
 一一二 十二同  
 一一八 八同  
 一二〇 十四同  
 一二七 七同  
 一四三 十一同  
 一四六 五同

なきや。 繋ぎ。 繋ぎ。  
 雪を。 雪を。 雪を。  
 とも。 とも。 とも。  
 言葉。 言葉。 言葉。  
 かね。 かね。 かね。  
 味。 味。 味。  
 めた。 めた。 めた。  
 とも。 とも。 とも。  
 近ず。 近ず。 近ず。  
 影。 影。 影。  
 世。 世。 世。  
 あれ。 あれ。 あれ。  
 とら。 とら。 とら。

なきや。 繋ぎ。 繋ぎ。  
 雪を。 雪を。 雪を。  
 とも。 とも。 とも。  
 言葉。 言葉。 言葉。  
 かね。 かね。 かね。  
 味。 味。 味。  
 めた。 めた。 めた。  
 とも。 とも。 とも。  
 近ず。 近ず。 近ず。  
 影。 影。 影。  
 世。 世。 世。  
 あれ。 あれ。 あれ。  
 とら。 とら。 とら。

普告

今井菊堂著

草蘆集

續時雨の巻

近

刊

著者ハ愚鈍ノ鼠輩也、叢中ノ蟲也、井中ノ蛙也、紛々タル凡俗也、コレ著者ガツ子ニ言フ所、然リト雖モ、主人ガ確カニコレヲ認ムル所也ト言フニ至ツテハ是レ誣言也、其稜々タル氣骨ト其洋々タル思想ト、其優々タル持操ト、國家、社會、文壇ニ濺尽セントセラル、滿腔ノ熱血ト、堅忍不拔、確固不變、苟クモ動カズ苟クモ動カス能ハザルノ熱誠ト精神トニ至ツテハ、主人ツネニ感泣、措ク能ハザルモノ而モ此篇ニ於テ、大ヒニ其言ノ誣ナラザルヲ見ル、蓋シ時雨ノ巻ハ著者ガ幼時ノ作也、順次ニ刊行セントスルモノハ順次ニ年長ケテノ作也、即チ主人ガ言ノ誣ナラザルヲ見ルノ篇也、故ニ主人茲ニ大ヒニ贅セズ、唯世人ガ之レヲ繙キテ、著者ト主人トガ言ノ何レガ當レリヤヲ評セラレンコトヲ待ツニアルノミ

金華堂主人敬白

明治卅二年三月十七日印刷  
明治卅二年三月二十日發行

〇( )〇  
〇(正價貳拾五錢)〇  
〇( )〇

版權所有

著者 今井菊堂

長野市元善町三十七番地

發行者 前田駒吉

長野縣上水内郡若槻村百四十一番地

印刷者 立花阜

長野市元善町三十七番地

發行所 金華堂

上水内郡吉田本町二百三十九番地

印刷所 吉澤活版所第二工場

東京市日本橋區通三丁目

發賣元

金櫻堂

東京市神田區表神保町

全

東京堂

